

早稻田學報

大正十二年三月十七日印刷 第七百四十一號 大正十二年三月十七日發行 每月一十日發行

目次

研究及感想

再び學園に於ける最近の問題に就て
プリンストン大學院の人格教育(其一)

總長 高田 早苗
教授 服部 文四郎

校報

理工學部中央研究所設置——高田總長就任認可——維持員會と三ヶ條の方針決議——第三回試驗規定審査委員會——教員會——事務局問題に關する教授團の會合——體育會總會——科外講演——臨時休校——前學年度未了試驗施行——劍道部功勞者表彰會——留學生の決定及歸朝——教員異動——故總長夫人五十日祭

校友會報

幹事會及び新舊會長送迎會——幹事會と學園の問題報告——校友間連絡並便宜機關設置に關する委員會——佐賀の故總長夫人遺髮埋葬式——支滿鮮地方校友の會合——稻保會春季大會——稻門艇友會懇話會——稻信會——大政五クラス會——戊申俱樂部——稻政會

面影

教授 堤 秀夫氏

校友動靜

業務異動——住所異動——大正十一年度得業生消息——改姓名——訃報

學會々合

アダムスミス誕生二百年祭——東洋文化の研究會——早大新聞學會主催の大演奏會——早稻田大學同高等學院佛教青年會

學生及運動記事

高等學院體育會大會——四百米突競走獎勵杯其他賞杯の寄贈——早大横濱會事業報告

雜錄

同好會の楽しい集り——大正十二年度職員慰勞會

記念事業部記事

本部記事——資金寄附申込芳名

東京牛込

早稻田大學校友會

電話牛込一三五番

東京八九八番

研究及感想

再び學園に於ける最近の

問題に就て

總長 高田 早苗

一、其後の経過

去る五月十日軍事研究團の發團式に端を發した紛糾事件は、爾來殆んど五旬に亘つて我が學園を或程度まで不安状態に置いたのは、頗る遺憾の事であつた。責任者たる私としても、未だ職に就かざる時より事件の發生に遭遇し、五十日間毎日の如くその事を中心を用いたのであり、又不思議な事にはその関連日何等か處理を要する問題に逢着し、殆んど寧日なき有様であつたのであるから、頗る身心の繁忙を極めたのであるが、さりとて、誤解と訛傳とが遠慮無く世間に傳はる今日の場合に、私の口より一應事件の成行と其の真相とを述べて置く必要があると考へるから、其の意味に於て以下簡略に申述べる。

早稲田學報の前號に載せた私の談話中にもあつた如くに、今度の紛糾事件には第一期と第二期とがあつて、第一期は、軍事、文化の二研究團の自發的解散と私の總長就任式の演説とに

よつて確に一段落を告げたのであり第二期の問題は政府對社會主義の問題であるから、その性質は外部的であるに相違ないのであつたが、不幸にして研究室の臨檢事件が起り、また、嫌疑を受けた佐野講師の所在不明といふために再び此の問題が早稲田化するやうになつたのは遺憾 極の事であつた。

夫れ以來學園内部の不安状態は漸く増して來て、一方には學園は甚だしく左傾した、その源泉は一二の教授講師にあるからこれは學園以外に遡つて貰ひたいといふものが出來、他方には、學園は往々にして暴力によつて壓迫せられんとするから、これに對抗しなければならぬといふ考も生ずるに至つた。而して臨檢事件に就ては、左右齊しく之を遺憾とし恥辱とするのであるが、一方は之を以て學園が左傾した必然の結果であると考へ、他方は之が爲に學園の權威が侵され、研究の自由が束縛されたと憤慨する者が出

來たのである。

二、問題に對する方針と維持員會の決議

形勢が右の通りになつて來ると、責任者たる私は、或る方針を以てこれに臨まなければ到底學園内の紛糾を治め、これをして紛擾に陥らしめぬやうにすることは出來ぬと考へたのである。こゝに於て私は去る六月十一日定時維持員會の開會を機として三ヶ條の方針をこれに提出し同意を求めたのであつた。即ち三ヶ條の方針とは左の通りである。

- 一、大學研究室ノ臨檢ニ應ジタルハ國法上止ムヲ得ザルガ爲ナルモ軍事學園ノ威嚴研究ノ自由ニ關係ヲ有スルガ故ニ事件ノ真相ト其推移如何ニ依リ適當ノ處置ヲ執ルベシ
- 一、本大學ノ一講師ガ其筋ノ嫌疑ヲ蒙リタルハ遺憾ナルモ未ダ以テ事件ノ真相ヲ確知スル能ハズ仍テ此際篤ト事實ヲ究メ適當ノ處置ヲ執ルベシ
- 一、思想問題ニ對シテハ總長就任式ニ於テ述べタル意見ノ徹底ヲ圖リ校紀ノ振肅ニ就テモ今後一層銳意努力スベシ

この方針は今一々こゝに説明するに及ばぬと思ふが、唯第三項に就いては少しく申し添へて置きたいことがある。其の中にある總長就任式に於て述べたる意見とは、今後の教育の方針として、先づ學生をして古き思想に通ぜしめ學生の腦髓に根柢あらしめて後に新しき思想にも通ぜしむるといふ事と、今一つは學園は研究の場所であり教育の場所であるが實行の場所でない、それ故に絶対に學生をして實行に携はらしめないといふことである。これは方針として掲げて置いたばかりでは無意義であるから、その徹底を圖るといふのは第三項前半の意味である。また其後半は、早稲田大學の如き大學園に於て種々の思想を懐く者があり、場合に依りてはその間に多少の衝突を見ることがあるのは已むを得ぬが、併し乍ら大體に於て當局者たる者は之を管理すると同時に指導せねばならぬ、中正不偏の方針を立て、これを導かねばならぬ、その前提としては大いに校紀の振肅を必要するといふ意味に外ならぬ。

この三ヶ條の方針は幸にして維持員會で満場一致の同意的決議を得て今は總長一個の方針でなく早稲田大學そのもの、方針となつたのである

三、教授團の賛成決議

因つて私は先づ大學中の各學部及び附屬諸學校の當事者を集めて、事件の推移を報告すると同時に維持員會の同意したる方針を提示し、當事者を経て各教授講師助教に傳へてその了解を得んとしたのであつたが各部の當事者はこれを諒とすると同時に、更に非公式の會合として教授講師助教の集會を求め、總長より親しく大學の方針と今日までの事件の経過とを話さんことを希望された。その結果六月十五日に貳百七拾餘名の教授講師助教諸君の會合が催され、その席に於て、私から詳しく報告をした處が、來會の人々一人も異議を唱ふる者なく、前の三方針を是認すると同時に、總長及びその他の當局者を信頼するの意を表されたのであつた。この會合の談話中に於て、私は、學生に對しては絶対に實行に干與することを禁ずる方針なる事を述べると共に、教授講師及び其の他の諸君と雖、校是といふことに重きを置かれて、苟めにも平常輕舉さるべき筈のなかるべきことにも言及したのである。

四、校友會幹事諸君も了解

その後、六月十八日に永樂俱樂部に於て校友會幹事諸君と會合し、前段と大同小異の報告を爲し、その了解を求めて置いたが、これは校友會の幹部としてこの事件に通曉してゐるの外に別段の意味はない。

五、校是に基づいて凡べてを處断

かくの如くにして、私竝に他の當局者は、今後何事が起らうとも、それに據つて處置すべき三ヶ條の指針を得たのであるから、今後如何なる方面より如何なる要求希望があつても、この指針に據つて處置すれば宜い事となつたのである。

その要求希望は方針確定以前もまたその後も色々あつたが、殊に某俱樂部に屬するといふ數名の校友が、教授講師數名の解職といふことを冀望要求し、或る時は夜陰或る時は拂曉に私の寓居を訪はれたこともあるが、私は前の方針に據つてその要求を拒絶したのであつた。早稻田大學の方針は、前述の如くに定まつたが、併つてこれに據つて今後事を處置するのは、私及び他の理事諸君の方針に委任さるべきものであると、私は信じてゐるのである。また、さうする事が私共當局者の義務でもあり責任でもあると思ふ。乍併、目下はその處置を執るべき場合に達して居らぬ事は瞭かである。然るが故に方針中にもその事を示してゐるのである。

且つ又一般の神經が思想問題の常として頗る鋭敏になつてゐる今日のとて、今その場合に到達しないのは、寧ろ自他の幸と言つても宜からうと思ふのである。

六、事實は何よりも雄辯

世人は動もすれば、早稻田は左傾してゐると言ふ。殊に今回の紛糾があつたために、一層世間の神經を衝動したと見えて、早稻田が赤化したなどといふものもあるさうだが、これ程真相を誤つた批評はないと思ふ。その真相を諺つてゐるといふ事は、茲に例を引いて話せば、直ちに悟ることが出来ると思へる。先年東京に少しづつ、虎列刺の流行したことがあつた。その場合毎に、地方の人々は東京中に虎列刺が蔓延したやうに考へて、東京の知人に倉皇見舞狀などを出したのもあつたが、後でだん／＼真相を聞いて見ると、東京市民は一向平氣であつて、市中に少しばかり虎列刺に罹つた人があつたといふ噂は聞きました。が位でおしまひになつたことがあつた。二百五十萬の人口を有する大都會に、一日に二人や三人虎列刺病患者が出た處で、東京在住の人は左程驚かぬが、地方の人は遠くから眺めてゐるだけ色々心配をするのである。

早稻田大學赤化云々の事も同じ様に、その學生一萬四千の内堂萬三千九百何十人までは、右にも左にも傾かず中正を守つて、少數者の間に多少の紛糾があつても大多數は靜かに勉強しつゝ、あるのは、間違ない事實である。この事實は何よりも、早稻田學園が赤化は勿論左傾もしてゐないといふ事を雄辯に語るものでなければならぬ。また、我が學園の學生の大部分は、私の就任式の演説を聞いて、心からこれに共鳴し、猶ほ、紛糾が漸く累なつても、私の絕對靜肅方針を遵守してゐる。のみならず、私の立てた三ヶ條の方針を是認して、學級毎に決議などしたものも尠くない。是等の事實に徴しても、所謂早稻田大學の左傾説は、杞憂に起つた臆説に過ぎぬとするのが至當である。但し、假令一人でも二人でも、甚だしく左傾するやうな心得違ひの學生があり、それが實行に走つて總長就任式に於て私の述べた方針に反する行動ある時は、これに對して相當の處置を取ることが勿論である。

七、教授講師の思想は中正にして堅實

世人の間には、早稻田の教授講師中左傾者があると心配してゐる者もある。佐野講師の如きは、左傾的犯罪の疑ひを受けて、目下捜索中にあるといふ事實があるから、その心配は決して無理でないのみならず、斯かる事實がある以上絶対に左傾者がないと言ふを得ぬが、三百有餘の教授講師中、大多數は甚しく左傾もせず右傾もせず、穩健なる思想を懐いて居らるゝ事は、私の保證するを俟たずして明らかなる事實である。或は、少數教授講師中には多少左傾者もあるかも知らぬが、また、多

少右傾者もあるであらう。しかしこれ程程度の問題であまりに左傾を憂へ過ぎる人は、その人が較や右傾した立場から物を観るが爲めであるとも必ずしも言ひ得ないことではあるまいと思ふ。唯最も憂ふべき事は學園の内外を問はず、世の中に極端な左傾者が出来ると、其反動としてまた、極端な右傾者が生ずることである。則ち左傾は右傾をして益々右傾ならしめ、また、右傾は左傾をして彌々左傾せしむるもので、この二つの潮流が割然區別され、社會を流るゝやうになり何處かでそれが出會くはずと一大衝突が起つて、とんでもない事が出来はしまいかといふ事は私は頗る心配する。しかしこれは、如何ほど心配しても、私如き者ではどうする事もできないのであつて、世の大政治家大經世家の手腕に俟つては今後學園内にさういふ事の無い様に精々注意するのが責務の一つであると思へる。また萬々が一人にも、我が學園に教鞭を執る人々の中で、その思想がますます極端になり、その結果、皇恩を忘れ國恩を忘れて、皇室に對して忠誠を缺き、國家の基礎を危ふするが如き言動を敢てするやうな者が、將來現はれるやうな不祥事が起るとすれば、私共の、責任上信念上、また、國家を擁護し學園を擁護する上からも、斷然

たる所置を執ることを提議するに躊躇しない考である。同時にまた、學園の研究の自由を就ては、私共は充分なる擁護の任に當らねばならぬことは言ふまでもないのである。抑々皇室の尊榮を保ち國民の幸福を全うするといふ信條は故大隈侯爵が明治十四年野に下られた當時天下に宣言されたのであつて、故侯爵が早稻田大學を創立されたのも教育の上にもこの主義主張を適用せんが爲めに外ならぬ。左れば早稻田一萬有餘の學徒はこの故侯爵の信條に違背してはならぬのであつて、又違背する者は一人も無いと信ずる。

園の迷惑を来さざる様に平生に於て心掛け、また、世間から誤解を来す虞れある言動を避くるに深く心を用ふるは、是又當然の事であつて、これも、殊更注意するに及ばぬと思ふが、尙ほ適當な時機に特に了解を得て置く必要があるかも知れぬ。要するに是等の事は、當局者の留意と教授諸君の常識とによつて適當に取扱はるべき問題であると考へる。

八、問題は一部分の行違に過ぎぬ

今度の紛糾事件に關する私の所見は大體以上述べた通りである。その當否は固より自分で判断すべきものでないから、謹んで世間の教を待つ次第である。

これを要するに假初にも、五十日にわたつた今度の紛糾事件に就て、多少世間に不安を感じしめ、學生父兄諸君をはじめその他の同情者諸君に尠からず心配を御掛け申した事は、何としても申譯のない次第であつて、茲に學園を代表して深く御詫びを致さねばならぬ。しかしこれと同時にこの事に關する假令好意的であるにもせよ、世間の誤解推測に對しては辯明し是正し置く必要があると考へて以上長々と申述べた次第である。

畢竟、今度の事件は固より騒動でも騒擾でもなく、學園の一部に起つた思想的行違の結果で、それが稍誇大に報道された時に前後して政府が

社會主義檢舉といふ事をはじめた爲め、それとこれとが錯綜して一層紛糾が長びき、随つて世間に心配をかける不安を感じしめたといふに外ならぬ次第である。

九、最後に一言

終りに臨みて、私は茲に一言して置きたい、即ち私は故總長大隈侯を輔けて、過去四十年間の大部分學園經營の任に當り、殊に、早稲田大學となし、續いて綜合大學の實を具へしむるために少しばかり力を致した關係がある。随つて、私はこの學園を愛する念慮に於ては、敢て人後に落ちぬ積りである、然るに今度、遇々故總長薨去の後に於て、再び學園を支配し代表する責任をとることとなつた所が、その就任に前後してこの紛糾が起つたのであつた。これは、一面から言へば、慚愧の至りに勝へないのであるが、乍併他面から言へば、我が愛する學園のために、偶然この難局に衝ることを得たのは、私の本懐とし光榮に思ふ次第である。私かこの場合一旦局に當つた以上は、魯鈍に鞭つて學園の爲に粉骨の努力を爲す考へであるから、我學園内の諸君この學園に平生同情を寄せらるる諸君子は、私のこの微衷を諒とし、今後も舊に倍して厚き御援助を賜はらんとを深く頼願する次第であります。

プリンストン大學院の人格教育(其一)

(再び米國の我が母校に歸り來て)

教授 服部文四郎

拂曉、窓外を眺むれば寢床の上にありても鴉の二羽三羽西より東に空を越るを望むべく、寢床を出でて隣室、湯に浴し窓外を見れば遙かに紐育、費府、華府通ひの汽車の白煙を鏗かせつ、東に西に四五十里の快速力を以て疾走するを窺ふべく、近くは冬枯れの樹木の寂しく點在せる間に米大陸の地平線、限りなき白雪の一望、際限なき原野を見るべく、小さき湖水の上には兒童、氷滑りをなして遊び、夜は群星、燦として輝くを望むことが出来る。是れ米國はニューヨークヤシ州プリンストン大學 Graduate College の三階、予が居室より見たる窓外の光景である。

一

Graduate College は何と翻譯すれば可ならんか。大學院と云は、茲處に講義あり、研究に没頭する學究のみの集會所たる如き感念を與へやう。洵に茲處に居住する者は悉く大學卒業生たるのみならず教授あり助教あり講師あるも、講義の行はる、所ではない。各自の居室あるも研究室、圖書室と云ふ程のものはない。寄宿舎と云はんか、事實は或は其れに近

れざる大學である。即ち試験に際しては試験答案紙の最初に左の句を書し署名する。
"I pledge my honour as a gentleman that during this examination I neither give nor receive assistance"

此の句を書かざれば試験は全然無効である。而して教授、講師は唯試験問題を與ふるのみにして直ちに試験場を去り、一人の監督も置かない。學生は試験中答案を書きながら雑談するものもある。時には喫煙するものもある、甚しきは便所に通ふものもある。而も一日紳士として其の名譽を誓ひたる以上、決して試験問題に付て雑談し、他の學生に教へ又は教へらることは斷じてない、カンニングは行はれない。之れ眞に驚くべきである。素より時玉にはカンニングを行ふものなきにあらず絶無と云ふことは出来ない。併しながら一旦カンニングをなしたるもの發見せらる、ときは學生は直ちに委員を設けて之を調査し教授團と共に其の事實を明白にし制裁を加へる。學生の自尊心、自治的精神は之を不問に付するを許さないものである。制裁は常に嚴重で、必ず退學處分である。而して最も茲に注意を要するは斯る不名譽を敢てする者は殆んど凡ての場合新入學生なることである。新入學生は未だプリンストン大學の感化を受

けること少なきものである。上級生に之なきは同時に大學教育の効果を窺ひ知ることを得せしめる。如何に米國の他の大學が之を模倣せんと欲するも常に失敗に終る。斯る制度が完全に行はれる大學である。強いて其の比を求むれば英國の牛津、劍橋兩大學に似て此の兩大學が米國化されて米國に特異なる發達をなせるものと云ふことも出来やう。グラヂュエートカレッジなるものが、プリンストンに現はれても敢て不思議とするにも及ばない。

三

プリンストン大學は飽迄も人格の養成を其の存在の使命として居る。人格を養成するには徒らに多數の學生を集めては其の目的を達し得ない。學生個人個人に就き周到なる注意を拂はねばならぬ。濫りに學生數の多數なるをのみ競ひ、之を誇るが如きは大に戒しめねばならぬ。學生數の多きを求むれば勢ひ quantity rather than quality となり易い。然れど教育の尙べきは quality rather than quantity である。各國、各大學各々其の事情を異にすれば一概に之を論評することは出来ないが、プリンストン大學は眞に教育の眞髓に觸れつゝあるものである。プリンストン大學は米國人間に於てはエール、ハーバートと共に第一流大學の内にあつても特に三大學として知られ、互

に競争しつゝあるが、エール、ハーバートの或は六千人或は一萬人の學生を有するに反し、プリンストンは僅かに二千人を有するに過ぎない。二千人素より小數なりと云ふことは出来ぬが、又他の大學に比し多數なりと云ふことは出来ない。單に學生數を標準とするならばプリンストンは比較的尠大學である。然るにも拘らず、其の大學としての價値は少しも失墜させない。否、學生數二千人なりと云ふは學生の集り來るもの少なきに依るにあらざりして、大學自ら學生數を制限し、濫りに其の増加を許さないのに依る。大學の資産缺乏せるに據るか云ふと二千萬弗、即ち四千萬圓の資産を擁し、財力は比較的豊富である。

プリンストン大學は人間を造るを以て其の使命とし、凡てを其の標準に依つて決定し、現在の事情の下に於ては徒らに學生數を増加せしむるを許さないものである。學生の月謝は年六百圓であるから大學に利益あるが如き感を與へるが、毫も月謝を主たる収入とするものではない。今尙ほ女子の入學を許さず、大學を膨脹せしむべき、商科、法科、醫科の如き Professional school を設けずして唯一心に人材を陶冶するに注意し、若し改善するの餘裕あらば先づ第一に内容の充實に充て quality を改良せんとするに努める。大學を擧げて恰

も一家族の如き觀を呈して居る。

從て學生個人個人に注意を拂ふこと極めて綿密で、こは今回予の親しく經驗したることであるが、二千人の學生全部に就て大學に詳細なる調査あり、何某の素行、特質、學科の得手、不得手、父兄の職業、人種、其他凡て其の個人學生の品行、學識に關して參考となるべきことは一々記録されて居る。日本人學生何某の成績如何と問へば、恰も囊中に物を捜るが如く、直ちに問はない事迄も詳細に示さるゝのである。斯くして各學生の學業、人格に關して其の足らざる所は之を補ひ、其の長所は益々之を發達進展せしめんとするのである。これが爲めに特に他の大學に類例な Proctorial System がある。

右の調査は獨り學生のみに限らるゝものではない。卒業生に關しても一々詳細なる記録である。予の如き外國學生たりしものに關しても一九〇六年即ち今から十六年前に學位を得てより今日に至る迄予の社會に於ける地位並に職務及び活動の狀況が調査されてある。現に予が再びプリンストン大學に歸り來るべきことは予が當地に到着前一ヶ月既に予の恩師並に舊友に知れ居りしものである。素よりプリンストン大學總長ヒツピン博士が費府に於てプリンストン大學出身者の世界的活動の狀況を述べ、偶々日本に於ては予の名を引

用して予が汎太平洋會議に出席し、其の序を以てプリンストン大學に歸り來るべきを演説せられたるに依りしとは云へ、卒業生の個人個人に對しても決して注意を怠るものではない。大學は一の大なる家庭である。其の父兄たり兄弟たるものが、相互の幸福と繁榮を祈り、之を喜び互に人格の向上を念とするは茲に於て當然のこと、云はねばならぬ。

物質萬能の傾向ある米國に於て斯の如き大學あるは一見奇なるが如きも、米國中唯一ヶ所にても斯の如き大學あるは大に人意を強くし、社會の清涼劑となるもので、決して無用のものと云ふことは斷じて出来ない。但し一般大學論は本論の目的とする所ではない。稍や岐路に入りたるが如き感あれば再び本論に入らう。

校

報

理工學部中央研究所設置

從來理工學部に於ては、工學の基礎たるべき標準測定之設備を缺したりしが、同部各學科に於て研究の結果を確實化し、且つ最近工學の進運に適應するため、同部に中央研究所を設くるに決し、先づ、恩賜館物理教室を基礎工學實驗室に充て、これを理工學部中央研究所基礎工學實驗室として、根柢ある工學の攻究を進むること、なりたり。

高田總長就任認可

高田總長就任の件は、六月七日付認可ありたり。

維持員會と三ヶ條の

方針決議

六月十一日午後二時定時維持員會を開き、大正十一年度、經常部、基

金部贊助會各收支決算を附議し、審議の上之を承認し、次で高田總長より最近學園に起れる諸問題に關して詳細なる報告を爲し、之に對し今後當局者の執るべき學園の方針に就いて三ヶ條の提案(卷首の總長談參照)ありたるに、滿場一致を以て總長の提案に同意の決議を爲し午後五時散會したり。

當日の出席者諸氏
市島、早速、渡邊、高田、田中、坪内、中島、松平伯、増田、昆田、寺尾、淺野、阪本、三枝、瀧澤子、鹽澤の各維持員

第三回試験規定審査委員

六月十八日午後三時、第三回試験規定審査委員會を開き、左の件に就き議したり。

一、了未試験受験者の卒業期を七月とする事、其の他

教員會

六月七日午後三時、政治經濟學部教授會を開き、大學院入學に關する件に就き熟議を凝らしたり。

六月十二日午後三時、法學部教授會を開き左の諸事項に就き協議決定する所ありたり。

- 一、學科目配當に關する件
- 一、選擇科目數改正の件等

六月十三日午後三時、專門部商科教員會を開き、教授上種々協議を爲す。

六月五日及十九日に文學部教授會例會を開き、左の諸件に就き審議したり。

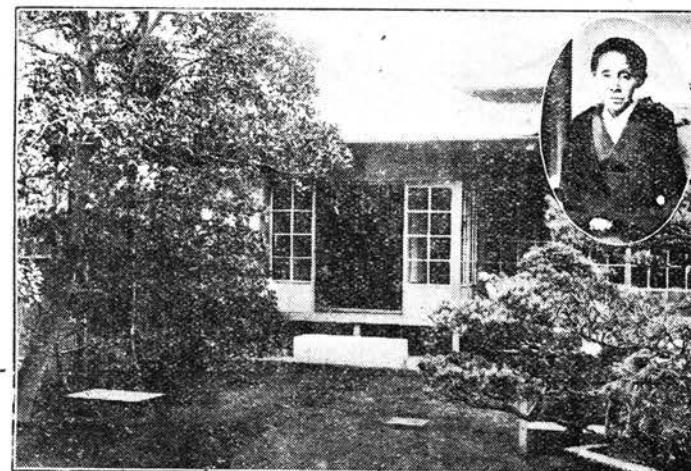
- 一、文學部内容充實に關する件
- 一、大學院學生指導に關する件
- 其の他

事務局問題に關する教授團の會合

先日高田總長は、學園に於ける過般來の紛糾問題に關して、各學部長及各附屬學校長等と會談の上種々了解を求められし結果、教員全部が相會して親しく其の説明を聴取したしとの希望生じたるを以て、六月十五日より十六日に亘り、大學各學部はじめ各附屬學校の教授講師助教授の會合が恩賜館に於て開かれたり。當日貳百七十餘名の教員出席の上、高田總長より學園に於ける最近の紛糾問

題に就き其の經過と真相とを詳細に説明し、更に六月十一日の維持員會の議決を経たる三ヶ條の方針を示されし處、出席の教授講師助教授は、學校當局の誠意ある努力を諒とし、進んで、滿場一致を以て今後大學の施設經營に就ては總長及び其の他の

故總長の祠堂と合影



當局者を信任するの意を表したり。

體育會總會

六月六日午後三時、恩賜館會議室に於て、體育會總會を開き、會長以下、各部長出席の上、左の諸事項に

就き熟議せり。

- 一、同會十一年度決算及十二年度豫算承認の件
- 一、同會規則一部改正の件其他

科外講演

五月十一日午後三時、講堂に於て左の科外講演あり

たるが、戰後國運の一大進展と共に百般の事物に就きて改造躍進日覺ましき米國の文化藝術につきて興味深き講演なりき。

『米國の文化改造と藝術』

本大學教授 日高只一氏

五月十八日午後三時、講堂に於て左の科外講演あり

老軀を提けて世界の極迄足跡到らざる所無き教授が、國を惟ふ至誠に世界の大勢を達觀して同胞發展の經綸を説かる、加ふるに教授獨持のユーモアを以てして聽衆を感奮せしむること甚だ深かりき。

『南亞米利加と日本』

一、日本商品の新販路として

二、有色人種排斥の策源地として

- 三、國際外交の一中心として

本大學教授 志賀 重昂氏

五月廿五日午後三時より中央校庭故總長銅像前に於て左の科外講演を

請ひたるが、氏は、先づ思想と經濟との緊密なる關係より説き起し、多

く新思想なる者は各時代に於ける權力者の專制(例へば經濟的苛斂)の如きに對する民衆の開放の要求より生ずるものにして、殊に最近外來の新思想といふが如きは、我が國に於て古來識者の屢々稱へたは既に實行したるものも少なからずとて、徒らに歐米の思想にのみ心醉する人々は我が民族に幾多の特色あり異彩ある文化あるを忘れて他に雷同するものなりと論じ、最後に今日の社會を改善すべき思想中、資本主義、及び社會主義其の他種々なる新思想あれども、社會主義の如くに資本を輕んじ若くは壓迫する時は資本は死藏し若くは外國に流出されて一國の生産力を減退し延いては國民の幸福を減殺するの虞れあり、また今日の露國の如くに各人勞働を強制するは、却つて個人の自由を制限する嫌ありとなし、殊に我國に於ては、一般に技術能率、及び責任觀念の向上を見るにあらざれば、急激なる改善は不可能なりとて、現制度に立脚する漸進的改革を主張し、何れの新思想若くは改革案を實行するにしても、要は、何れを以て國民若くは人類の幸福増進に適するやの問題を深く考慮して決すべきものなりと斷じて、講演を結ばれたるが、聽衆は熱心に傾聽し、了りて種々なる質問應答ありたり。

『新思想と經濟問題』

鐘淵新植株式會社々長 武藤 山治氏

六月十四日午後三時、講堂に於て左の科外講演を開きしが、氏は、最近國民生活の國際的性質を述べ、隨つて國民外交の要を説き、進んで當面の問題として社會の耳目を集めたる對露折衝の問題に就き嚴正なる批判を下されたり。

『國民生活と外交問題』

衆議院議員 望月小太郎氏

六月十五日午後三時、講堂に於て左の科外講演ありたるが、氏は、イブセンは晩年獨逸の某大學より哲學博士の學位を贈られたるが、イブセンは果して哲學的能力ありたるや否やと疑問を提示して、イブセンは少年時代に特に哲學を研究したる形跡なきに拘はらず、其卓越せる直覺的能力暗示力に富む心理、其の實生活より進り出づる人生觀、人生の理想、乃至向上心を極端まで發揮せしめんとする點等に於て、哲學的能力を充分に發揮せるものにして、彼は、問題の發見者若くは提出者として優に特色ある哲學者たるを失はずとなす。更に彼の藝術は、嚴肅なる人生を表はすに美味なる形式を以てし、靜かに聞く時は、魂の運動を聴くことを得るの靈感を與へ、また、彼は責任を以て自由なる生活を爲すことを教

義とせりとて、其の該博なる講演を終へられたるが、聴衆に多大の感銘を與へたり。

「ヘンリック、イブセンの哲學」

六月八日故北白川宮成久王殿下御葬儀に付き敬弔の意を表し臨時休校す。

臨時休校

前學年度未了試験施行

前學年度に於ける、政經學部、法學部、及び商學部の各未了試験は、左の如く施行したり。

白六月二十六日
至七月十日

劍道部功勞者表彰會

六月十二日午後二時、大隈會館に於て、體育會劍道部功勞者表彰會を開き、高野師範、中島部長、同部附會田小使の各勤績功勞を表彰し、謝狀及び記念品を贈りたるが、當日總長差支へに就き難波幹事は總長の祝辭を代讀したり。

留學生の決定及び歸朝

講師森口多里氏は、工藝美術史研究のため本大學留學生として派遣に決したり。留學生教授堤秀夫氏は、二ヶ年餘に及び歐米各國にて電氣工學の新研究を爲し、五月三十日無事

歸朝せられ、其の研鑽の結晶を以て教壇に臨まる、こと、なれり。

教員異動

右教授囑任
講師 伊達 保美氏
早稻田大學文學士 吉村 繁俊氏
文學部近代劇の實際的研究擔任
早稻田大學文學士 森田 哲二氏
文學部探礦學擔任
文學士 森田 哲二氏

右講師囑任
教授 岩田 一郎氏
講師 清水 行恕氏
右都合に因り辭任せらる。
前號中訂正
(教員囑任ノ部)
文學士藤田豊八氏とあるを文學博士に、同氏擔任學科目「印度史」あるを、「東西海上交通史」に訂正

謹告

名簿編纂の時期が近づきました。平素用意は致して居りますが、この上とも徹底的に完全を期し度いと思ひますから 昨年度の名簿に載つて居りませんが、御職業御住所に其後御異動がありまますならば(全然記載洩でありましたならば尙更のこと)御手数數年ら此際至急事務所宛に御通知下さる様亦其の他の事項につきまして御同様御願ひ致します。

尙ほ其節は何卒卒業年度及學部科をも併せ御明記下さい。

大正十二年七月十日

早稻田大學校友會事務所

校友各位

職業には官公職名、御勤先、名譽職名等を含みます。

故總長夫人五十日祭

春將に逝かんとする頃侯爵夫人の逝去に遭ひてより日は忽ち七週して早くも五十日の忌日を迎ふるに至る。六月十六日侯爵家に於ては親族及極親近の關係ある人々打集ふてしめやかに嚴かに五十日の祭典を執り行はれた。而して此日夫人の靈を別邸内故總長の祠堂に合祀し、かくて二柱一體の神靈は縁深く思出で盡きぬ早稻田の地を永へに守らる、こと、なつたのである。

侯爵家に於ては快く一般の祠堂へ參觀する事を諾されたれば、校友諸君にして母校を訪はる、折あらば必ず祠堂に參拜せられんことを望む。

大正十一年度卒業生

大學各學部

◎政治經濟部政治學科

◎同經濟學科

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|--------|---------|----------|-----------|----------|----------|-----------|----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|---------|---------|----------|----------|----------|----------|----------|---------|-------|----------|----------|----------|----------|----------|---------|----------|---------|-----------|
| 桂 義次山口 | 川端 正身 | 津島 文治 | 青森 樽崎 | 太三 | 福岡 山口孫三郎 | 愛知 藥師川信一 | 京都 阿部 勇 | 北海道 三宅 正一 | 岐阜 島田 義文 | 福岡 重利 | 後一 | 東京 平野 學 | 大分 鈴木 宇市 | 福島 計 二十名 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 池田 千秋 | 愛媛 入江 弘 | 茨城 橋本 精知 | 福井 西 孝治 | 福岡 堀江 賴廣 | 北海道 千葉 匡 | 岩手 奥山 實群 | 馬 奧平 稔 | 廣島 荻生 德義 | 福島 渡邊 政隆 | 東京 勝屋 弘治 | 佐賀 龜崎 清三 | 福岡 神永 正雄 | 栃木 但木 成人 | 宮城 谷田 薰 | 香川 武種 了純 | 富山 中村 肇 | 司 村瀨 忠夫 | 岐阜 山本新七郎 | 福岡 山口彦四郎 | 山形 矢島 泰信 | 東京 松藤 秀雄 | 福岡 卷島吉三郎 | 埼玉 昂岡 山 | 寺井 正武 | 大分 安藤 圓藏 | 岐阜 赤藤 一二 | 兵庫 佐々木義美 | 福島 木曾 壽吉 | 廣島 木村 敏夫 | 東京 京極 定 | 東京 宮田 政治 | 高知 南 保國 | 富山 計 三十三名 |
| 今井 晃作 | 千葉 石川 堅 | 廣島 伊藤 貞一 | 神奈川 岩水 貞良 | 福岡 原 亮 | 新潟 長谷川了介 | 神奈川 間 孔太郎 | 岐阜 早坂 秀夫 | 宮城 馬場 清衛 | 長崎 西村吉太郎 | 京都 星 四郎 | 福島 星野 芳郎 | 大阪 堀田 一正 | 東京 邊菜 匡國 | 兵庫 庫 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

本堂	格福井	土井隆四郎	岡山	東	舜英石川	里井慶之助	香川
千葉	五郎千葉	力武	重剛	福岡	酒井久美	齋木久雄	岡山
大口	清澄德島	大島	雅彦	佐賀	榑山善三郎	木村米太郎	靜岡
大石德太郎	東京	大久保	俊之輔	東京	木村皓一	三宅縫之助	媛岡
太田	至孝秋田	王	俊支那		橋高武憲	廣島	山
音羽	啓俊滋賀	渡邊	廣福島		三島景美	福岡	宮林榮廣島
渡邊	禎塔玉	加瀬	源次新潟		志々目正人	鹿兒島	磯
川股	武雄北海道	金子	正弘富山		志々目正人	鹿兒島	磯
柿添	元福岡	角田	耕一東京		志々目正人	鹿兒島	磯
吉田	實愛知	吉田	義郎岩手		志々目正人	鹿兒島	磯
米山	勝美北海道	高橋	一山形		志々目正人	鹿兒島	磯
高橋	憲吉山形	高橋	萬壽龜東京		志々目正人	鹿兒島	磯
高井	長輔長崎	武田	保愛媛		志々目正人	鹿兒島	磯
武侯	勇往東京	竹内	孫次郎愛知		志々目正人	鹿兒島	磯
玉井	光愛媛	立花	嘉美福島		志々目正人	鹿兒島	磯
龍田	茂和歌山	津島	庄次青森		志々目正人	鹿兒島	磯
塚本	進福岡	塚田	一甫長野		志々目正人	鹿兒島	磯
坪川	查福井	中村	文雄神奈川		志々目正人	鹿兒島	磯
中村	佐一長野	中山	忠男山口		志々目正人	鹿兒島	磯
中山	和雄東京	中山	西吉東京		志々目正人	鹿兒島	磯
中田	宗彦東京	中尾	芳介山口		志々目正人	鹿兒島	磯
中川	壽一福岡	永田	周作兵庫		志々目正人	鹿兒島	磯
室岡	省三青森	向	若太郎廣島		志々目正人	鹿兒島	磯
村山	甚太郎福岡	梅田	眞城廣島		志々目正人	鹿兒島	磯
内田	秀三郎愛知	鶴沼	一耶秋田		志々目正人	鹿兒島	磯
則近	源次山口	法林	慈範廣島		志々目正人	鹿兒島	磯
栗山	吾一東京	山口	國城長崎		志々目正人	鹿兒島	磯
山田	謙吉靜岡	八角	錦吾東京		志々目正人	鹿兒島	磯
松村	茂奈長	松岡	源之眞滋賀		志々目正人	鹿兒島	磯
松原	禎之助兵庫	益田	兼施山口		志々目正人	鹿兒島	磯
藤井	舜次三重	藤野	浩佐賀		志々目正人	鹿兒島	磯
福田	亮山口	深須	亨東京		志々目正人	鹿兒島	磯
深町	啓一石川	小林	知一長崎		志々目正人	鹿兒島	磯
小林	武城埼玉	小林	尚一和歌山		志々目正人	鹿兒島	磯
河野	省助鹿兒島	近藤	力松青森		志々目正人	鹿兒島	磯
安部	登樹大分	荒木	正人佐賀		志々目正人	鹿兒島	磯

◎法學部(獨法)

岩崎	彥雄千葉	西村	聰京都
河本	眞一廣島	長場	正利新潟
野田	武夫熊本	鈴木	馨愛知

◎同(英法)

池口	治郎奈良	石黒	秀夫新潟
堀内	晴文東京	張清	漢支那
太田	金次郎愛知	吉田	篤雄愛媛
辻	平三郎京都	福田	滋一栃木
新井	靜二郎兵庫		

◎同(英法)

井上	周三和歌山	橋本	吉五郎大阪
水間	盛一北海道	荻原	善彦鳥取
神藤	利一神奈川	田中	直江群馬
田中	國夫秋田	堤	清三福岡
中野	松夫廣島	中村	高一東京
内藤	三樹愛知	武藤	互郎岐阜

◎文學部哲學科

井桁	祐吉千葉	池本	朝治兵庫
伊藤	惟夫千葉	石坂	章熊本
磯	勇廣島	市川	猛長崎
居出	松藏香川	飯山	禮有枋木
花本	淺治郎奈良	橋村	信夫愛知
豊田	彦彦岐阜	土井	譽雄山口
長曾	我部寅雄熊本	大中	臣康廣茨城
大塚	弘枋木	大塚	利雄兵庫
太田	衛茨城	小田	功正己長野
河合	利恒富山	寛	萬壽馬奈良
吉田	鞆一郎石川	田中	孫盛石川
立花	千秋福岡	中村	彌三次廣島
村田	忠美大阪	内山	清長野
山田	文雄靜岡	八木	博保香川
松山	翠鹿兒島	藤	光遠福井
淺井	幸造東京	齋藤	禎三神奈川
菊池	修太郎岩手	北岡	隆康奈良
北村	種次郎大阪	鈴木	辰次福島

◎同西洋哲學專攻

堀米	壽萬男長野
實名	見善岡山
齋藤	明德東京

◎同英文學專攻

今關	眞雄千葉	伊佐	襄岐阜
東條	鳳平千葉	大村	弘毅兵庫
和田	繁次大阪	川津	學四香川
河合	勇東京	村橋	智熊本
山本	多賀雄岡山	安井	敏彦岡山
松永	紫朗福岡	松坂	秀一神奈川

◎同社會哲學專攻

岩崎	務東京	落合	政明靜岡
大江	清一兵庫	高橋	民之助千葉
下山	鎌吉山形	鈴木	峯吉千葉

◎同文學科國文學專攻

田熊	文助山口	山田	三喜男愛知
英	敏道東京	免取	慶一郎東京
鈴木	拾五郎福井		

◎同佛蘭西文學專攻

帆足	圖南次大分	宮永	徳司大分
小笠原	政信新潟	小河	内泰三重
岡本	亮介大分	尾島	庄太郎富山
竹内	秀太郎岡山	高林	和作大阪
根津	三之丞東京	中山	謙秀福島
中島	源次佐賀	山田	弘京都
前田	泰治茨城	佐藤	文一岩手
笹尾	勇長崎	鈴木	雄三京都

◎同獨逸文學專攻

大山	廣光鹿兒島	小田	切照東京
和田	傳神奈川	佐藤	輝夫德島

◎同露西亞文學專攻

川口	尚輝德島
----	------

◎同佛蘭西文學專攻

梅田	寛三郎兵庫	杉本	喬群馬
三宅	賢東京	平岡	雅英香川

◎同史學科

(1)

石野 瑛岐 卓 龜倉順一郎 新潟 湯

計二名

(2)

出石 誠彦 岡山 十河 佑貞 香川

計三名

◎商學部

(1)

伊藤 祐一 岐阜 卓 伊藤松太郎 千葉 葉

伊勢 竹松 高知 石井一愛 重山 梨

石橋 慎 靜岡 石渡一春 治神奈川

石川 榮一 東京 石塚 六郎 栃木

岩永 俊一 長崎 岩永 經次 佐賀

井出 信 靜岡 井原 美三 大阪

馬場喜久藏 長崎 馬場寬治 大阪

原田義之助 島根 如 敏夫 和歌山

濱田 保兵 庫 林 一也 千葉

服部 尙 東京 西澤 侃三 兵庫

西田庄之助 滋賀 丹羽 戀愛 知

仁平 久直 秋田 堀内 匡長 野

堀 成雄 大阪 豐田 慎三 大阪

戶谷 萬雷 廣島 戶野真喜雄 廣島

地村 繁一 滋賀 大谷 久雄 神奈川

大橋 弘治 茨城 大西治郎右衛門 神奈川

大久保正理 茨城 太田 寬治 大阪

小川嘉三郎 大阪 岡 照島 根

岡田 精一 東京 岡本新一郎 宮城

小川 宗良 岐阜 小笠原 伸岩 手

折井勘五郎 長野 奥野 平滋 賀

和田 俊郎 靜岡 和田 馨岐 卓

渡邊 章 北海道 渡邊勉二郎 福島

渡部 正直 福島 渡部 萬里 東京

渡 三二 愛媛 脇不義一 奈良

片岡 彰三 和歌山 片山 健造 靜岡

川上隆三 群馬 河村宗一郎 岐阜

書上喜太郎 群馬 加納 俊彦 岐阜

景安 覺太郎 井 神崎光之助 大分

梶原 義博 山梨 吉田 郁郎 東京

吉田 克郎 栃木 吉田 源三 愛知

吉村 四郎 東京 橫山 義則 鹿兒島

橫山 朝善 東京 橫坂 桑治 群馬

高田亥三 群馬 高田 隆平 兵庫

高野 光壽 栃木 高木 一東 東京

田中 二郎 山梨 田中 道夫 愛媛

田中 稔 兵庫 田中 篤美 長野

武田 克己 愛媛 立 松太郎 東京

竹家光治 大阪 辻 信次 大阪

宗田真吉 大阪 辻 俊雄 廣島

坪井 敏治 靜岡 津田 金重 愛知

土田 守雄 福島 土持 綱孝 鹿兒島

角井謹一 兵庫 中道 保兵 兵庫

中島 計伍 群馬 中村 鐵哉 兵庫

中込 七郎 山梨 中山 喬樹 岡山

永井 三郎 石川 永岡 靜一 長崎

長瀬 量平 福島 村井 克己 和歌山

村田秀之助 愛知 村岡 勝次 佐賀

齋藤 木 內田正次 東京 肥土 知一 埼玉

上田 道郎 石川 能勢 英夫 高知

黒沼仁三郎 東京 黒澤 福壽 茨城

釘宮 義雄 大分 郡司 貞教 東京

久保 重卓 愛媛 山田 榮司 岡山

山田 久東 東京 山田 英愛 知

山下 一夫 靜岡 山野 晉爾 東京

八木常三郎 京都 柳下 秀雄 神奈川

山本 益治 靜岡 山口 支策 東京

松岡 成美 東京 松崎 明長 東京

降旗 德彌 長野 藤原 武夫 愛媛

藤澤 孝一 北海道 不島 勝彦 東京

小林 義春 東京 小西喜三郎 香川

小川敏次郎 京都 小尾 泰鷹 東京

小塚 英一 靜岡 小杉 孝藏 滋賀

合田 均 愛媛 江原 貞哉 埼玉

寺田 一郎 神奈川 寺島 彰 愛媛

淺見 巖 東京 淺間 如司 東京

安藤 恭一 秋田 天野新太郎 東京

有田 滿雄 東京 阿部清次郎 廣島

櫻井 佐千 葉 櫻木 宮藏 東京

佐久間 徹 千葉 佐藤 庄造 東京

北儀 一郎 兵庫 木村 文一 廣島

宮島孝太郎 東京 南 甚一郎 富山

宮坂 泰平 長野 宮田 宗一 長野

三宅 良造 和歌山 篠田 宗一 長野

水谷 清一 岐阜 清水 精市 北海道

柴田 正治 愛知 瀧谷 德治 福島

清水茂次郎 和歌山 瀧崎 芳秀 和歌山

東海林太郎 秋田 鹽崎 基長 野

平井 昌賢 東京 久野 岩治 愛知

平塚 隆遠 東京 森 富次郎 石川

肥土 知一 埼玉 鈴木 邦之 彌子 葉

瀨野尾喜造 栃木 鈴木 原茂夫 廣島

須田 正藏 栃木 杉山 謙治 東京

鈴木 彦 神奈川 杉山 謙治 東京

杉本 恒夫 東京 菅生 益雄 廣島

井上 次郎 岡山 井上 俊吉 山形

井上友太郎 大阪 井上 正也 鳥取

井上 道和 廣島 井浦 操 東京

井口 成士 德島 井深 重雄 北海道

井澤 謹三 東京 石井 真輔 東京

石井榮三郎 神奈川 石原 二郎 德島

石橋 敏雄 石川 石原 春雄 愛媛

石原 備吉 愛媛 石川 德重 東京

石塚 喜久 東京 石田 一英 新潟

石田 氏宗 大分 石村卯一郎 福岡

岩崎 重道 福岡 岩崎 義雄 和歌山

岩崎 數馬 和歌山 岩田 繁三 北海道

岩田 高一郎 愛知 伊藤 修爾 岐阜

伊藤 隼太 千葉 池田 靖夫 岡山

池上 武岡 山 池田 秀一 奈良

今岡 重正 兵庫 飯田 聚一 京都

飯田 真雄 東京 飯塚 律 靜岡

飯垣與三郎 東京 稻本 廣吉 香川

五百澤昇三 北海道 磯貝 武彌 新潟

磯貝 勇宮 崎 磯貝 武彌 新潟

武夫 宮崎 幾田 重賴 廣島

市川 三郎 廣島 板橋儀兵衛 宮城

乾 忠昭 京都 伊藤祐治郎 大阪

岩崎彌七郎 香川 伊東 寬一 靜岡

呂 盤 石 臺灣 原 小三 佐賀

原 省吾 佐賀 原 政彦 長野

原田 一三 岡山 原田 武敏 福岡

林 隆一 大阪 林 圭介 靜岡

林原修太郎 鳥取 林 麟四 岡山

林田 惟一 熊本 春山 茂岐 阜

波江野武雄 東京 間 綠平 岐阜

灰塚 傳福 岡 羽尾 保群 馬

秦 孝一 北海道 馬場 護福 岡

橋井 亮三 鳥取 橋本 秀一 廣島

橋本 定靜 石川 濱中 好雄 大阪

濱野 洋亮 山口 濱谷平三郎 富山

板東 正直 德島 土生津 董崎 玉

西山 真雄 福島 西原英太郎 岡山

西村 豐治 兵庫 西卷吉太郎 新潟

本多 成美 東京 本間 謙治 北海道

寶珠山瑞樹 福岡 堀規矩左右兵衛 堀田 正山口

堀規矩左右兵衛 堀田 健 東京

土井 道雄 山形 東條伊勢雄 東京

富吉 俊二 鳥取 德田 靜男 廣島

島居 俊夫 和歌山 友成 康 靜岡

梅 忠文 東京 大山 義一 栃木

大山 繁雄 茨城 大石 二郎 福岡

大西桶次郎 三重 大西幸一郎 滋賀

大町 戀宮 城 大島 渡山 口

大藏 國彦 大分 大森 敏夫 愛知

大澤 謙治 東京 大庭 敏道 靜岡

大場文三郎 山形 大内 公宮 城

大住 精一 東京 大塚小二郎 宮城

大津 博郎 愛知 大城戶繁慶 福岡

太田 爲敏 香川 太田 守吉 島根

太田 福次 長崎 太田 榮一 和歌山

太田 鍊政 石川 大久保利忠 東京

小川 正道 千葉 小栗 昇造 愛知

小生壽次郎 長崎 小野 最平 岡山

小野田康雅 大阪 小倉 一男 東京

小山田 精山 形 岡部 三男 茨城

岡本 忠純 東京 岡本 浩介 靜岡

岡 正臣 高知 越智佐加衛 愛媛

押見 純一 東京 押田 了三 三重

尾谷 眞郎 廣島 奧野 雄三 北海道

渡邊 眞美 愛媛 渡邊 完 岡山

渡邊 信敏 福岡 渡邊 年雄 東京

渡邊 悅次 群馬 若井 年雄 東京

若杉 秀長 崎 若松 英雄 德島

綿貫 隆吉 長野 和田 包弘 廣島

加藤 仙三郎 愛知 加藤新次郎 滋賀

加藤 正幸 三重 川口 金彌 山梨

川妻 卓二 廣島 川島 照之 愛知

香川 三郎福井	片山 信市兵	片山 山之助佐賀	金子 秀一東	金子 有兵庫	金子 堅作群馬	片岡 正一山口	兼松 武義德島	角谷 清次郎東	川平 惠堡沖繩	河合 保雄大	河邊 勳愛知	加瀬 宗樹新潟	柏木 喜介東	米田 德一廣島	吉村 清知富山	吉橋 丈太郎愛知	吉永 忠三神奈川	田中 雄勝大	田中 道太郎東	田中 直吉秋田	田村 進大	田村 房吉茨城	田手 浩宮城	田野 倉友市東	高橋 房治神奈川	高橋 藤麿新潟	高橋 亮東	高橋 知彰東	高橋 雪哉東	高澤 源一郎山形	高柳 次春富山	高木 和東	武內 保岡山	武田 萬兵衛佐賀	竹村 久安大	竹森 定次郎鳥取	竹內 一夫大阪	
劉貞一 一郎北海道	片山 久夫三重	金田 盛進岡山	金子 豐熊本	金子 辨作栃木	金子 基長野	兼田 一男兵庫	兼子 進東	川根 隆次郎茨城	河村 秀孝愛知	加納 寬東	加瀬 武次郎千葉	米澤 長之助北海道	吉田 信治東	吉宗 貞之大阪	吉利 英雄兵庫	吉川 善雄神奈川	横田 清一北海道	田中 忠良靜岡	田中 富士松長崎	田中 房吉千葉	田村 主計和歌山	田村 隆二神奈川	田淵 勘太岡山	高橋 覺三郎群馬	高橋 德衛宮城	高橋 益彌愛媛	高橋 益治北海道	高橋 準千葉	高島 小三郎香川	高田 鐵次宮崎	高倉 長榮東	武富 主次郎北海道	武川 文二群馬	竹內 多彌治靜岡	竹味 惣平愛知	玉井 成美愛媛	玉置 本弘奈良	
玉木 得四郎新潟	瀧 嘉衛三重	巽 市次兵庫	瀧山 仁四雄大	外松 玉吉長野	津田 真三愛媛	津村 宏一廣島	辻田 貫一三重	鶴田 義明熊本	堤 正雄香川	筒井 三郎東	都筑 仁吉福井	中村 勉廣島	中村 德治東	中村 作一郎秋田	中野 晉千葉	中野 晉千東	中野 重幸東	中島 重幸東	中島 重幸東	中尾 幸哉大	中馬 衛東	中澤 孝治島取	永田 勇造鹿兒島	永田 定武福島	長野 泰明茨城	長柄 健二岐阜	名取 幸八東	波田 靜夫福岡	內藤 行雄熊本	村田 勤藏東	村松 弘大阪	村川 拓石川	村田 魁夫熊本	內田 健男島根	內田 多彌治靜岡	植野 秀亮山口	植松 孝博東	上田 吉雄長野
梅川 實三大阪	棚橋 龜一兵庫	多島 太郎石川	丹下 五郎愛媛	津田 喜一郎石川	津下 甫岡山	津野 永作新潟	辻 平四郎兵庫	坪井 憲治岡山	土屋 惟夫靜岡	樺木 德四郎栃木	中村 年副廣島	中村 智一埼玉	中野 勇次郎德島	中野 泰二東	中井 重雄香川	中井 重雄香川	中四 等和歌山	中島 政愛長崎	中原 龜夫岡山	中田 喜代太郎東	永田 國知佐賀	永井 喜代治島根	永久 一雄山口	長澤 明德島根	內藤 忠兵庫	那須 德三郎大	繩手 正雄福岡	村井 三藏滋賀	村瀬 進三東	村山 源吉東	村上 一朗京都	內田 伊三郎埼玉	內田 正名東	植木 精一郎東	上松 友三長野	上野 鑑二香川	梅澤 昇靜岡	
鶴川 久壽福島	宇野 守男福岡	白田 忠藏岡山	打矢 正明東	野崎 秋夫岡山	野波 福次郎島根	野田 禧造愛媛	野田 禧造愛媛	久保 三九愛媛	久保 三九愛媛	熊岡 寬一靜岡	黑岩 逸郎北海道	黑田 義廣神奈川	桑原 今朝之助新潟	楠田 貞春佐賀	福屋 純沖繩	藤田 彦治山口	藤井 敏雄兵庫	藤倉 美彌次栃木	藤原 英夫兵庫	布施 武夫石川	深見 秀次愛知	文野 熊男高知	古田 國雄岐阜	小泉 信一茨城	小坂 清崎玉	小松 武彦東	小林 茂三郎長野	小西 孟彦和歌山	後藤 進新潟	後藤 章雄東	近藤 理慶島根	近藤 圭北海道	兒玉 真作愛知	江崎 榮一長崎	遠藤 哲雄千葉	櫻並 昌司北海道		
榎水 尚志群馬	榎田 信雄靜岡	海住 爲雄廣島	野崎 幸雄東	野間 碩平愛媛	野村 壽藏熊本	則松 幹茂東	久保 田 頑岩手	熊谷 光夫宮城	熊川 義道東	黑田 義廣神奈川	國枝 彦岐阜	桑原 今朝之助新潟	楠田 貞春佐賀	福屋 純沖繩	藤田 彦治山口	藤井 敏雄兵庫	藤倉 美彌次栃木	藤原 英夫兵庫	布施 武夫石川	深見 秀次愛知	文野 熊男高知	古田 國雄岐阜	小泉 信一茨城	小坂 清崎玉	小松 武彦東	小林 茂三郎長野	小西 孟彦和歌山	後藤 進新潟	後藤 章雄東	近藤 理慶島根	近藤 圭北海道	兒玉 真作愛知	江崎 榮一長崎	遠藤 哲雄千葉	櫻並 昌司北海道			
松原 猛夫宮崎	松崎 明治鹿兒島	松下 敏愛知	松岡 敬太郎香川	增島 式郎靜岡	眞鍋 龜吉愛媛	丸茂 忠興山梨	益原 盛人廣島	正木 正家山梨	福島 高一北海道	福島 鈺之助東	福澤 勇造山梨	福井 春之助京都	福田 八次佐賀	藤田 亮作茨城	藤井 金三郎京都	藤井 郁太郎東	藤倉 繁太郎長崎	深田 嘉平愛知	伏見 洋東	古川 義一東	船尾 竊信岡山	小泉 吉晴神奈川	小高 一朗神奈川	小松 信久富山	小島 萬次東	越賀 治郎東	後藤 忠夫德島	近藤 保三宮崎	近藤 俊一郎東	兒玉 春三岡山	河野 繁二鹿兒島	江坂 鶴吉東	江頭 謹一郎佐賀	榎戶 源治郎茨城	寺尾 市松兵庫	寺尾 一二長野		
手束 小一郎德島	淺野 泰助福井	淺井 太郎愛知	荒井 純四郎富山	荒川 藤一郎栃木	赤澤 英之助東	赤城 幸太郎福井	新井 誠新潟	明石 禮治秋田	安倍 一松岡山	淺岡 信夫廣島	淡路 周策北海道	油木 兵吉郎鳥取	相原 滿三郎神奈川	蘆田 勝兵庫	齊藤 秀三郎福井	齊藤 彌次郎山形	齊藤 善治東	齊藤 修造山口	齊藤 龍雄宮城	佐藤 憲治福井	佐藤 新一宮城	佐藤 勝馬大分	佐々木 友三富山	佐多 秀雄鹿兒島	笹田 時雄熊本	坂本 季一大阪	坂上 金之助大阪	櫻井 慶太郎愛知	澤野 武次郎東	澤野 繁二鹿兒島	里見 湧二京都	鮫川 清彦北海道	木村 秀吉東	木村 保次郎東	木下 利弘岡山	寺田 誠伍石川		
淺野 常藏福井	淺井 吉藏奈良	荒井 初太郎東	荒川 案山子愛知	赤澤 俊夫東	赤阪 義雄大	新井 大長野	明石 美之松愛媛	安藤 清岐阜	阿部 敏治山形	朝倉 喜則東	味松 芳太郎兵庫	足立 健一郎兵庫	網釘 育三山梨	齊藤 信千東	齊藤 昇東	齊藤 東平東	齊藤 晃東	齊藤 長造愛知	佐藤 四郎福島	佐藤 與三富山	佐藤 政五郎北海道	佐久間 勝實鹿兒島	佐保 剛長崎	笹田 登靜岡	坂本 謙次岩手	境 悌次郎熊本	澤田 榮北海道	澤口 馨秋田	笹村 長雄富山	乙女 英一東	木村 金造埼玉	木村 富士雄東	木下 建三神奈川					

の連絡並に便宜機關設置の議あり、特に委員五名を舉げて、其の基礎案に就き調査を進むること、なれるが六月七日には午後四時より永樂俱樂部に於て該委員會を開き、右機關の組織及び活動範圍等に關して協議を重ねたり。猶ほ、自今、屢々この委員會を催し、充分の討究を爲し、議を凝して成案を見るに至る筈なり。

佐賀の故總長夫人遺髮埋葬

故侯爵夫人綾子刀自の葬儀は既記の如く御遺族初め早稲田學園を蔽へる哀愁の衷に赤誠を以て執り行はれたが、音羽の丘護國寺の森なる故侯の墓側に一基を添へて奥津城とせられたのは實に故侯夫妻の御志と覺えられた。されば故總長の郷里なる佐賀の龍泰寺にも故侯の墓標獨り淋しく立つ可くもあらねばとて故總長夫人の遺髮をば遙々佐賀に埋葬すること、なつた。

五月十三日、故侯の例に則つて白錦爛を以て覆はれた桐と檜との二重の柩に納まれる遺髮は久松家令に持せられて東京驛に着し、特別急行列車寢臺車の中に花輪生花に飾られて神々しく安置された。同驛にては大隈侯、侯爵夫人を初めとし其の他御近親の方々は固より、高田總長、前島男爵其の他大學維持員評議員校友會幹事等百餘名の人々盡きせぬ名残りを惜みて見送るうち、九時三十分遺髮は久松家令、隨行の教授五來欣

造氏等に護られて東京を立つた。列車が沿道の各驛を通過する毎に校友及其他有志の送迎絶ゆる間無く殊に名古屋、京都、大阪に於ては校

友團より花環を贈られ、今更に遺徳海内に洽きを深く感ぜしめられた。門司以後は特に佐賀より出迎へたる徳永佐賀市助役、佐賀商業會議所會



幹事會と新舊會長送迎會

頭福田慶四郎氏、校友總代表山齋四郎氏及び其の他の有志七十八名遺髮に侍して十四日午後二時二分佐賀驛に到着した。

佐賀驛には、玉置警部部長、野口市長、古賀少將、古賀善兵衛氏等をはじめ土地の名士、村雲婦人會其の他の團體及び一般民衆舉りて出迎へ

驛を埋むる許りの多数に上つたが、中にも大隈家舊領地平ヶ里村民數十名は曩に故侯の靈を迎へて涙乾く暇も無く再び夫人の靈を迎ふるに至り哀悼の至誠面に溢れて見る人をして感に堪えざらしめた。列車到着するや久松家令遺髮を捧げ五來教授、永野靜雄氏等之に従つて奉迎者が悼情の至情を籠むる敬禮の中に降車した、大阪、名古屋、佐賀の各校友會より贈りし大花輪を先頭に腕車を連ねて、佐賀高等女學校、成美女學校、實科女學校、市内各小學校生徒が堵列出迎する沿道を通つて思ひ出で深き大隈侯記念館に入つた。

午後四時同所を出で、龍泰寺に向ふ、遺髮は故侯の遺髮埋葬式に湛ぎたる涙の痕も消えやらぬ當時の靈柩をそのまゝ、用ゐて之に納め平ヶ里村民に擔はれて徐ろに進む。花輪銘旗も悲しげに之に先頭し、五來教授は弔花を久松家令は位牌を奉持して靈柩に侍す。龍泰寺門内には佐賀高等女學校其他市内各女學校生徒約七百名整列して靈柩を迎へ、堂内には野口市長はじめ有志百數名參列して之を待つ。靈柩到着すれば直に之を正面に安置して式を開いた。型の如く供物を獻け四導師の法語の後大導師佐々木大圓氏は嚴かに最後の讀經を夫人の靈に捧げた。次いで大本山専使高梁者高傳寺の住職の弔辭あり、やがて五來教授は徐ろに立ち靈前に

進みて恭しく早稲田大學總長高田博士に代りて弔詞を奏した、引續き野口市長、校友會代表栗山齋四郎氏の弔詞あつて後燒香に移り、柳杉木辨一、新宮清朗、菊地龍太郎諸氏を始め一般會葬者順次に哀悼の至情を香の烟にこめて靈に別を告げ、午後六時五分、夕陽の輝き遙か西方淨土を偲ばしむる頌莊重なる儀式は終つた。(佐賀校友會報)

輓辭

嗚呼故早稲田大學總長大隈侯爵夫人薨セラレ幸ニ侯爵ノ故山ニ於ケル葬儀ノ舉行ニ過フ景仰哀慕天地ニ號哭シテ中腸自ラ裂ケントス
嗚呼侯爵夫人靈慧貞淑ノ天資ヲ以テ俊邁綿密ノ思慮ヲ運ラス故ニ侯爵ノ公私萬般ニ於ケル高遠精深ノ理想ヲ淵博雄偉ノ胸略トナ行フガ爲メ機微玄奧ノ間ニ内助ノ功勞ヲ盡シ侯爵ノ崇徳鴻業ヲシテ愈々其ノ光輝ヲ揚ゲシメタリ
吾早稲田大學ハ其ノ東京專門學校トシテ創設セラレタル時ヨリ今日ニ至ルマテ四十年ノ久シキ變遷ヲ經タルモ侯爵夫人ハ終始一貫シテ靈慧ノ心血ヲ吾大學ニ注ガレ大事ニ遭フ毎ニ能ク勇斷ノ實績ヲ擧ゲ吾大學ヲ渾涵スル仁澤ハ殊ニ深クシテ厚シ
嗚呼侯爵夫人ハ今ヤ侯爵ト共ニ永久ノ安眠ニ就カレ復タ其ノ清容慈訓ヲ拜スルヲ得ズ然トモ其ノ淑靈靈魂ハ長ク現世ニ遊ビテ後人ヲ惠ム所有ラン爰ニ大葬ニ侍シ謹ミテ衷情ヲ陳ブ
大正十二年五月十四日
早稲田大學總長法學博士高田早苗

支滿鮮地方校友の會合

池田 龍一

私は去る四月二十九日東京出發支滿鮮巡遊の途に就き、五月二日大連に渡つた。今回の行は視察觀光も其目的であるが、尙時日の許す限り各地の校友諸君と接觸して舊淵を敘し併せて平素の御援助を謝したいと思つたのである。大連では校友中川氏の盡力で視察上種々便宜を蒙つたが尙同氏等の斡旋で校友其他の方々を同地湖月に招待した。幸ひ二十餘名の來賓中約半數の校友諸君が出席されたのは私として此上もない満足であつた。即ち出席者は左の諸君である。

稻葉 武 小栗 半平 寶性 確成
佐藤 四郎 中川竹太郎 松田 臻
堀 洋三 丹羽 幸夫 笠原 博
上片平直輔 古閑 三天

滯連三日私は青島に赴き、校友福田氏の案内で滯留後の同地の景況を視察し、五月七日在留校友諸君をグランドホテルに招待したが、當夜は唐突の思立ちにも拘らず左記校友諸氏が出席されたのは矢張同窓同學の親しみが強いからであらう。席上私は早稻田大學の近況を報告し、校友諸氏より青島の近況を聞き、快談時

白杵伊三郎 關 善實 大崎 誠三
森川知二郎 福田辨治郎 柿内 晴
阪梨 繁雄 井上 靜樹 田邊郁太郎
遠藤 要 郎學 韶

明くる八日早朝私は青島出發、途中濟南に一泊のあたり排日運動を目撃し、夫より津浦鐵道に依つて天津に向ふことにしたが、彼の臨城の土匪事件の爲めに豫定より五時間も遅れて九日午後十時纔に天津に到着することが出来た。翌十日は代理店の金山氏を煩して市内を一覽、夜は官民有志一同を同地敷島に招請した。此處でも十一名の左記校友諸君が出席されて種々懷舊談に花を咲かせたのである。

土井 寅三 莊 環 珂 中津川 寛
上田古兵衛 太田利三郎 遠藤 盛鶴
佐々木護邦 澤 一郎 菊池 忠治
荒木 信一 鈴木 貞三

十一日午前十時天津を去つて北京に行き、市吉三菱支店長同社員鈴木氏等の出迎に預かり、市吉永持、劉の諸君に案内を受け萬壽山を始め愛親覺羅氏の廟業の遺趾を尋ね、八達嶺の險を攀ちて長城の雄大に驚嘆し尙劉君の盡力で總統府内の拜觀を許されたことは茲に特記して謝意を表する次第である。十三日には劉君の斡旋で左の校友諸氏から車輿樓に招待され、母校の懷舊談や記念事業の報告やらで、時ならぬ日支親善の清筵が開かれ午夜に及んで散會した。

林長 民 江 庸 江 天 鐸
陸 夢 熊 劉 驥 業 賀 嗣 章
桑田 豐藏 永持 徳一 市吉 徹夫
原田梁二郎 鈴木 謙

て奉天に向ひ、十五日早曉山海關より天下第一關と稱する長城の片鱗を望み午後七時半奉天に著いた。十六日には撫順に行き在留校友諸氏の出迎を受け、且つ其案内で老虎臺炭坑の六百尺地下の坑道作業や、モンド瓦斯發生の實況や、露天掘の偉觀等を視察した。其夜撫順ホテルに左記校友諸君其他と會合し、少人数ながら頗る愉快な一夜を過した。

榎本喜平次 高橋福次郎 清水 喜一
白神 靜一 宮本 豊次 島 彌
中川靜次郎 倉田 熊延

十七日夜奉天を發し途中平壤を経て十九日京城に到着。二十日夜京城ホテルに五十餘名の官民有志者を招待した。時恰も地方官會議の爲め來城された亥角和田兩理事を始め左記有力校友の出席を得たので非常の盛會を極めた。

亥角 仲藏 和田 純 板橋 勲松
林原 憲貞 千葉 隆 横尾信一郎
桶 圓壽 露崎 薫 中原 元次
樹田 直 渡谷 禮治 守永和三郎
内田竹三郎

令名の高い人である。二十二日朝私は京城を去つて元山に赴いたが、車中隔らずも西田元山毎日社長に邂逅、同氏の打電に依つて元山に着くや否や廣瀬廣瀨諸校友に出迎へられ、少憩後廣瀨朝鮮郵船支店長の案内で、築港事業や露國避難民の窮狀を視察した。其夜左記在留校友は同地丸芳に一夕の宴を張つて私の健康を祝し、且つ母校の懷舊談やら記念事業の報告やらで十一時過ぐる頃漸く宴を閉じた。

西田常三郎 廣瀨 博 廣瀨 信夫
田中 勇夫 徳光 算正 松川 奇
小林儀三郎 西村孝一郎

二十三日私は更に北の方咸興に赴き、所謂咸南平野の墾田事業を一眼翌朝同地出發歸途大阪京都を経て五月三十日歸京したが、約一個月に亙る巡遊中、私は校友諸君の熱誠なる歓迎を受け、加ふるに其頼母しい發展に接して非常な愉快と満足とを感じたのである。爰に在外學友の動靜を報道し併せて旅中の御懇待に對して衷心謝意を表する次第である。

四月中旬開催の筈なりし春季大會も、延び／＼になつて五月廿五日の一夕、故大隈總長夫人の追悼會を兼ねて、永樂俱樂部で催された。講演を御願した鹽澤先生、志賀先生を始め、集まるもの四十五名。食堂の閉

何れも同業の連中として電話などでは鹿爪らしき挨拶を交はして居るものも此處では、昔の學生時代に返り、遠慮もなく腹藏もない。フォークの音、皿の音、一しきりの後別室に於て森副會長、開會の辭に加へて恭しく故總長夫人追悼の意を表し、故大隈總長を學園の父とすれば夫人は正に母であつたと述べ。

次で志賀先生は御得意なる人口問題、食糧問題、果てはキューバ移民問題、南阿御旅行談等巧みなる警句を交へられつゝ、大に吾人の蒙を啓かれた。御旅行の都合で石油問題を拜聽する事の出来なかつたのは遺憾であつた。

最後に鹽澤先生は亡き夫人の日常につき未だ吾人が耳にしなかつた幾多の美德を讃へられ、特に故侯爵を世界的たらしめたる半面には、夫人内助の功多かりしならむとの御話に皆襟を正して拜聽し一層追慕の情禁ずる能はざるものがあつた。小澤幹事は會の近況と維持費の件につき希望する處あつて閉會したのは午後十時。(鈴木報)

出席人名
鹽澤先生 志賀先生 森 盛二郎
村井 五郎 松村 源藏 三田村甚三郎
小澤増太郎 横山 賀利 立花 要一
田島 二郎 鳥山 貞治 倉橋 知了
鈴木 瀨平 杉井 音吉 川口準太郎
渡邊 操 脇田邦一郎 久保 義美
筒井 常丸 加藤 信一 石井 佐伸

福富 源一 山田 敬三 永瀨 博
 鯉淵 啓 廣田 章 飯盛 作郎
 鈴木 兼司 龍口 護信 鷺島 啓樹
 高橋 三郎 淺倉與五郎 北 仁
 加納 俊彦 藤 清六 大崎喜八郎
 關根 富雄 矢野 照樹 星野徳太郎
 飯田 博二 武田 信敏 田中 音吉
 伊藤 十郎 水野 純一

稻門艇友會懇話會

母校端艇部の先輩より成立する稻門艇友會は五月廿七日大學端艇部競漕會後、吉例によりて會員懇話會を淺草廣小路松喜に開催、岸畑新會員の紹介、會報に關する報告、艇友會専用レースボート四艘艇の建造等の事務を報告し、直ちに酒宴に移り、席上千葉、杉山氏の餘興あり、頗る盛會裡に散會せり。

出席氏名左如し。

氏家教授 深澤 政介 鈴木治三郎
 二階堂行善 片山 利久 竹本 宇吉
 大井派太郎 千葉 五郎 田中 房吉
 杉本 光治 岸畑 久吉 上村 鐵雄
 水野 信安 椋原 政治 盛山 智利
 喜多壯一郎 木村 雄治 杉山 閣二

月上旬に一隻竣工の豫定なり。と同時にも亦更めて、地方の會員諸君にもオールド・ボイス・レースの爲めに檣を飛ばして挑戦をなす筈。艇友會の會に顔を出さぬことのなき、宮木、澁谷、三輪老先輩等の出席なきは洵に淋しかりき。(同會常任幹事報)

稻信會

逕信省に勤務する理工科並びに工手學校卒業者よりなる稻信會は會員廣島逕信局技師小林薫氏の東京を機とし五月卅一日午後五時半より懐しい故總長の遺跡大隈會館に會合を催した。生憎の雨降りにも關らず集るもの十七名、食堂に入つてから門倉君の動議で自己紹介をして各自の經歷やら現在の仕事などを話し合つた。別室に退いてからも盡きぬ快談に時の移るのも忘れた。然し閉館の都合もあるので名残を惜み乍ら九時半散會した。

當日前幹事の指名によつて次期の幹事は左の六氏にお願ひすることになつた。

益子 充 黒田 豐 堀口 次郎
 向田英太郎 前川幸一郎 佐野 昌一
 坪内 信 向田英太郎 三谷 馮三
 石川 正一 佐野 昌一 前川幸一郎
 門倉 則之 淺川 李弋 小 薫
 名達 隆義 岩崎信之助 渡邊 一二
 堀口 次郎 益子 充 杉浦 讓治
 板野 義行 石橋 勇一

大政五クラス會

天正五年度政治科クラス會は久方振りにて其第五回例會を五月拾貳日午後六時から丸の内永樂クラブで開催、在京同窓二十三名の中左記九名出席、晚餐を共にし、各々職業の紹介やら懷舊談に興をやり、遅れて馳せ参じたる出井君から恰もその日母校々庭に演ぜられた軍事研究團對反對派の騷擾頭末を聴取し「母校の爲め一同憂ひを共にしたり。尙當番幹事の發議により例會を少くとも一ヶ月おきに開催すること、幹事はイロハ順の交替にて之れに當ること等を決議し、更に閑談に時を過し、新緑風薫る初夏の一夜は參會者の腦裡にそれぐの印象を刻し和氣霽々の裡に十一時散會。

出席者
 上田 輝治 加藤 景福 兒島 英俊
 馬場平二郎 中村新四郎 不破 爲治
 飯島 徳次(次回幹事) 出井 盛之
 竹村 佳康(當番幹事)

戊申俱樂部
 六月十七日午前十時より大隈會館に於て戊申俱樂部例會を開催す。當日は生憎雨天なりしも出席者意外に多く、席上小倉房藏君の有益なる歐米視察談あり、歡談湧き大いに賑ふ。次回會合は卒業後十五年記念の爲大舉箱根温泉に遠足することを決し午後三時半十二分に歡を盡し散會せり。

當日出席者左の如し。
 村井 五郎 長澤 倉吉 嶋崎 尙
 井口 誠一 岡田正太郎 谷口 眞三
 小倉 房藏 宮本鉄太郎 岡 秀保
 本間 勇

稻政會

五月二十六日午後六時半から我が稻政會を若葉薫る日比谷公園側の幸樂に於て催した。久し振の會合である、集るもの左記十一名、種々な方面に活動して多少の社會苦も經驗して居るが、まだなか／＼學生氣分は失せない。牛肉は煮へる、盃は飛ぶ、

面影

教授

堤 秀 夫 氏

今日の國際的問題となつて政治家は固より各國民の齊しく鷹目を以て注視を怠らぬ、メソポタミアや、メキシコ、其の他の油田問題は、主もに現代文明に重きをなす工業動力源泉の不足といふ事實から起つたもので、この難問を如何にして解決し、以て工業文明の不斷の發展を期するかに就ては、實際家は言ふまでもなく、斯學研究者等の深く心を砕いてゐる所である。それで、最近歐米に涉り工業動力の研究を深うし、工業の實際的考察を爲して歸られた教授堤秀夫氏を煩はして、彼の地の實狀を窺ひ、併せて、我が國に於ける問題解決の暗示をも得ること、した。

一日氏を牛込若松町の宅に訪へば快く請ひを容れながら、「歸つて見ますと、日本の方も中々進んでるまするので、此方の事をも併せて調べて見なければ私の留學が完了せぬ様な譯で、まだ確然とお話し申し上げられない次第ですが」と謙遜して、斷片的な感想でも宜ければとて、次の如く語られた。

『工業の研究、殊に實際的應用になると米國が一番で、獨逸などは今の處では只目前の瀕瀕に窮々としてゐる様に見受けましたが、米國で特に注意を惹いたのは動力問題で、最近自動車や飛行機などの恐るべき發達の結果、先づ、石

油が第一に不足を生じたことであ
ります。かのスミソニアン・インス
ティテュートが一九一七年に發表し
た所に依ると（其發表は必ずしも
當らぬが）米國の石油は向ふ五ヶ
年で行詰ると言ふた程である。従
つて之れを償ふ爲めに新油田の開
發が計畫され、メキシコ、アラサ
カより遠くメソポタミヤ、露國地
方にまでその手を伸ばして、茲に
國際動力爭奪戦が起つて來たので
ある。他方には石油に代るべき燃
料の研究をなし、石炭の低溫乾溜
が問題となり、アルコール又は固
體爆發物までも動力燃料に關係を
もつ様になつて來たのである。尙
ほ又石炭、水力電氣などの利用し
得られる部分は可成之れに代へる
と云ふ方針をとり、石炭、水力電
氣なども、その消費現在の如くで
は甚だ不經濟である故、その最も
有效なる利用法を講ずる様になつ
て來た事である。そこで米國では
各所に動力の統一事業が起りつ、
ある。例へば、カリフォルニア、
ワシントン、モンタナ等の西部諸
州一帯及び東部ボストンからワシ
ントン兩市間に横はる一大工業地
などがその大きいものである。

後者は一九一八年に九千六百の工
業會社五百五十八の電力會社の會
議によつて計畫せられたもので、
翌年案成り、各社共その私利私慾

を離れてこの案に従ひ、さづ小發
電所の廢止合併、大發電所の計畫、
新水力地の發開、送電線網の整理
蒸汽鐵道の電化等が行はれ、一九
三〇年までのプログラムが確立し
て只今着々進捗中である。こんな
次第でこの地方だけで、一九三〇



しい。假令ば倫敦市の電氣事業を
見ても判りますが、十三の會社が
各々歴史保存の美名の下に古い機
械と能率の悪い系統とを固守して
居る。試みに統一しては如何と切
り出せば日本官廳の様に「色々の
面倒な事情があるのだ」と云ふて
退けて恬として居る。」

とて、米國の製造會社な
どは、その資金の一割を
研究調査費に當て、居る
などは珍らしくないこと
などを述べられ、更に
「米人の製造業に對する
新しい傾向は、今迄の
様に新機のものを出
せんと努力する以外に
普通ありふれたものを
科學的研究の力を借
りて革命を起さうとす
る事である。多くある
例の内、吾人の日常用
ふる襪に就て述べて見
れば、例のアロー會社
がカラの科學的研究を
初めたのは今から六年
前であるとの事ですが今では全米
國のカラ製造高の八割はこの會社
製のものであるとの事です、之れ
は單に凡ての會社を買収して、事
業獨占を計るのではなく、研究に
研究した結果他のもの、眞似の出
來ぬ品を最も能率の良い製造法に

よつて安置に給し以てその敗路を
擴張したのである。この戦法によ
つて世界を風靡せんとして居るの
が只今の米國の一傾向で、コダツ
クの寫眞器、フォードの自動車な
どもその一例であつて、要するに
事業は懸引中心から技術本位に遷
つて來たと云ふても過言ではない
僅か針一本でも世界的の良品で、
世界的の事業になし得られるとの
自信を持つに到り、種類の多い事
で業務を擴張せず、品質と特長に
よつてその敗路を確實に獲めよう
とするに到つた。従つて研究を尊
重し技術者を尊敬する様になつて
來たのである。されば戦時日本に
雨後の筍の如く簇生した藥品會社
の如き一つの工業が有望と見て、
同種の泡沫會社が續出し、經濟上
の危機に逢ふて醜態を演ずるやう
なことは比較的少ない様に思は
れる。」

最後に、日本の現在又は將來に於て

爲すべきことを問へば「工業上から
見ますれば、目下の急務は各種の調
査機關を官民合同に設け一般に工業
上の理解を與へ、個人にも又團體に
も國家にも今少し費のないものにせ
ねばならぬ。日本は水力が豊富であ
るから工業上有利だなど、高聲であ
つてはならぬ。ナイアガラ瀑布の動
力だけに及ばぬ水力ではないか。
工業立國策を主張するには動力の間
題より初めねばなるまい」と主張さ
れた。

かくて興味ある觀察談や、御感想
は盡きなかつたが、他日を期して辭
去した。因に氏は、早中出身で、大
正二年に本大學理工學科を終へ、特
待研究生より助教に進み、更に、
大正五年から約貳ヶ年間東北大學に
て本多博士の下に深く研究を積み、
大正十年より二ヶ年半米英獨に涉り
て學術及實地の研鑽を経て、今春歸
朝されたのである。

校 友 動 靜

業 務 異 動

邦政、專政
田崎千夫(三三六)長崎税關總務課へ
轉任
藤代三九三(三八)臺灣淡水郡守と
なる(淡水街)
吉村貞義(四五)國際興信所山口縣
支所長となる(山口縣宇部市西區本
町二ノ六三)
伊豆富人(一)東京朝日新聞社へ入

社

龍田辰昌(7) 加藤商會社營業課
長となる(牛込區原町二ノ三〇)
飯森作郎(8) 麴町區有樂町一阿部
ビルディング内朝日海上保險會社へ入
る
清水兵士(8) 群馬縣廳勤務(前橋
市南曲輪町六五)
須々田誠一郎(10) 東京日々新聞社
在勤(府下代々幡町代々木富ヶ谷一
五三三)

春名成章(三九) 大連市瀋洲日々新
聞社
大木康孝(2) 日清生命九州支社次
長(福岡市地行西町二八)
大久保清藏(7) 印度孟買より歸朝
大阪市東區淡路町横濱正金銀行支店
勤務となる
越達彌(9) 本大學大學院に入る

權名隆() 講護士芝區新櫻田町一
九平民法律事務所
宮尾武男(6) 守谷商會を退き三青
商會を經營し藥品、塗料、金物、建
築材料類の販賣、代理、仲立に従事
す

高嶺朝扶(三九) 首里市役所
高日義海(九) 岩手縣立花巻高等
女學校長となる
田中清太(8) 兵庫縣立第三神戶中

學校教諭となる
小牧龍雄(四〇) 樺太大泊町船見町
共立商會
成富新一(四一) 神戸市榮町三日本
銀行支店
井手亮藏(四二) 日清火災東京支店
長となる
杉浦俊正(四四) 山口高等商業學校
會計主任となる 山口町飯田町一〇五
藤永品太郎(四五) 山口縣小野田町
小野田炭礦專務取締役となる
大橋薫(3) 大阪市梅田藤田銀行梅
田出張所長となる
田代亮(3) 秋田縣南秋田郡金足村
黒川日本石油株式會社黒川礦業所
松村増男(3) 門司市大阪商船株式
會社門司支店
千葉胤英(6) 麴町區永樂町高田商
會
太田黒代(6) 十五銀行熊本支店
(熊本市新屋敷水道端町四番町(四五))
渡邊平三(6) 沖電氣會社へ入る
(芝區三光町二六九)
神田健一(6) 愛知銀行柳橋支店詰
となる
中川豊(7) 逗子養神亭沼津三島館
熱海聖光園總支配人となる
小島文雄(7) 三菱礦業會社商務課
井上直(8) 兵庫縣武庫郡鳴尾村丸
三合資會社内
西川誠一(8) 石川島造船所深川分
工場(深川區宮川町三)

大 商

小林商治(8) 下關市岬之町七九日
本石油會社下關販賣店
和田諒(8) 横濱市表高島町二三菱
倉庫出張所
伊藤十郎(9) 日本橋區元四日市町
村井銀行内日章火災再保險會社
河合一光(9) 府下目黒町三田大日
本麥酒會社
福富源一(9) 日本橋北鞘町一東京
火災保險會社
春日井寛(10) 鐵道省大臣官房保健
課
田端一良(10) 宮川モスリン會社へ
入る(三重縣度會郡小俣村二五五〇)
長友繁(10) 日本橋通三丁目丸善本
店

石川二郎(2) 下谷區仲根岸町五一
常盤組電氣業經營
青木秀彦(3) 名古屋市南區呼續町
中央鐵工所(名古屋市東區千種町塚
越八)
立花末次郎(5) 三菱礦業會社を辭
し日興社へ入る
長谷川朋藏(10) 岐阜縣美濃町武義
中學校教諭となる

小田誠諦(3) 愛知縣立商業學校教
諭となる
脇本多加志(5) 病氣退職郷里岡山
縣郡窪郡庄村に養生中
大山教年(10) 兵庫縣龍野中學校

興石彌久雄(9) 法律事務所開設
(山形縣酒田町上臺町一六)
飯田義一(11) 退職名古屋市中區葛
町一〇六
森本健藏(12) 住友肥料株式會社員
(愛媛縣新居濱總開)

谷新太郎(十九) 四谷區北伊賀町三
秋元平八(二三) 本郷區根津片町二
四(電小四二四四)
別府敏治(三二) 福岡縣築上郡三毛
門村
藏内正太(三三) 荏原郡碑衾村碑文
谷
西岡英夫(三八) 臺北市南門町一ノ
一〇
小谷四郎(四一) 鳥取市吉方町
木村辰次郎(2) 府下大森新井宿西
沼六八七
生島勝一(3) 神戸市平野神田町五
六
山本篤一郎(5) 兵庫縣武庫郡西灘
村五毛二七
植木茂一(5) 府下目黒町中目黒六
五九
橋本劉三(8) 麻布區山元町專光寺
別當好平(8) 神田區田代町六草川
方(中央新聞記者)
金井政弘(8) 府下野方村新井五九
八
福岡正(8) 大阪府西成郡玉出町五
六二
木村孫作(8) 江原道蘆野郡温井面
蘇臺里
菊地清治(8) 府下西巢鴨町堀ノ内
二三
細谷雅雄(9) 府下戸塚町源兵衛二
四一

推 薦

住所異動

教職員

秋本文海(講師) 赤坂區福吉町一ほ
ノ二二前田方
大澤一郎(助教授) 府下東中野上ノ
原九〇八
岡田誠一(講師) 深川區東森下町三
八
上井磯吉(學院教授) 府下上戸塚伊
勢ヶ原八四一
藤田豊八(講師) 府下池袋三三八
藤井新一(講師) 小石川區音羽町八
ノ一五
深澤由次郎(講師) 府下淀橋町柏木
三五一
小林明(講師) 小石川區音羽町五ノ
一七椎山處方
兒島獻吉郎(講師) 小石川區第六天
町四八
近藤潤次郎(講師) 牛込區市ヶ谷富
久町六〇
岸本能武太(教授) 小石川區茗荷谷
町一〇五
シエリング(講師) 牛込區辨天町五

教職員

教職員

教職員

教職員

邦政、專政

邦政、專政

朝原吾郎(9) 長野縣北安曇郡南小谷村

大澤曉一(10) 牛込區喜久井町二〇

森方(やまと新聞記者)

山谷健四郎(10) 新潟市白山浦二丁目

松田幸郷(10) 千葉縣成田町三五二

木谷定市(10) 大阪府北河内郡三郷村西橋波

田邊幸次郎(二八) 府下上落合前田

小野寺辨二郎(四〇) 京都市上京區今出川通大宮東第百銀行西陣支店內

林繁一(二) 牛込區市ヶ谷富久町一〇

江藤米市(二) 小石川區同心町二五

永川俊美(五) 府下蒲田町御園三二

岩城之雄(六) 廣島市臺屋町二六

白南薫(六) 慶南普州郡中城洞一〇

五(一) 新高等普通學校校長

藏本莊民(六) 33 Mason St. N. Somerville 44 Mass., U.S.A.

河野忠一(六) 府下淀橋町角筈六六

河井常三郎(七) 名簿に鐵工業研究とあるは政治學專攻の誤 e/o Y. M. C. A. 1609 Sutter St. San Francisco Calif. U.S.A.

中村三之丞(七) 今夏まで在獨、それより渡英、(藤本ビルブローカー) 銀行を辭す

島崎一郎(七) 府下大森不入斗一三

小野甫善(八) 本郷五丁目十六

岡田信高(八) 愛媛縣越智郡菊間町

木原頼一(八) 兵庫縣加古郡加古川町大川町

楊祥蔭(10) 小石川區高田豐川町四三關中方

青木瀧之助(二八) 長野縣小諸町乙五

渡邊享(一九) 赤坂區氷川町

遠藤恭三郎(二〇) 愛媛縣松山地方裁判所

中尾清太郎(二九) 神奈川縣鎌倉姥ヶ谷

近藤親(四四) 小石川區大塚窪町二四

首藤泰生(八) 芝區高輪北町九第三商會

保科市松(九) 神田區美土代町二

小林孝一(10) 小石川區武島町二

日本武道會

筋瀬德松(三三) 廣島縣福山市櫻馬場町

山田太一郎(三〇) 牛込區戸山町二

橋詰町四〇 (大阪辯護士會副會長に當選す)

古瀬正勝(三九) 富山縣西礪波郡西野尻村上川崎

萩原盛夫(七) 名古屋市東區東本重町酒井方

大濱信泉(七) 牛込區早稻田鶴卷町三〇八

濱口八郎(九) 府下戸塚町源兵衛一

高瀬長雄(九) 赤坂區青山南町五丁目

阿部太郎(九) 滿洲木溪湖滿鐵地方事務所

小西利吉(九) 奈良縣丹波市町三島

木下宗徳(九) 府下平塚村下蛇窪六三八

山本正雄(九) 新潟縣東頸城郡大島村菖蒲

長野貞一(四一) 石川縣小松町

朝倉重威(四一) 府下駒澤村上馬引

尾原雄飛(四二) 大阪市西區幸町通四ノ四九

福永純(四二) 大阪市東區御差町明

吉岡文治郎(四三) 赤坂區青山北町四ノ九八

能登博(四三) 大連市伏見臺滿鐵新社宅三三號ノ三

小池榮(四三) 秋田縣能代港町

松原龍太郎(四五) 南滿洲撫順高砂町金光教撫順教會長

山本忠夫(二) 牛込區若松町七

佐藤祖衛(二) 名古屋市東區田代町越前四一

淺岡齋(三) 千葉縣海上郡銚子町今宮三軒町

塚本哲郎(五) 府下高田雜司ヶ谷四

吉田甲子太郎(七) 芝區新堀町二五

下村千秋(八) 府下杉並村高圓寺六〇四

西村實(九) 奈良縣吉野郡大淀町縣

立吉野高等女學校

藤本勇(九) 大分縣直入郡竹田町山

寺河俊盛(九) 廣島市南竹屋町樋ノ小路

松倉照三郎(四〇) 臺北市鐵道部調度課

朽木立(四一) 府下澁谷宿卷町十四

關澤廉(四二) 牛込區仲町六〇

別府俊一郎(四三) 福岡縣鞍手郡宮田村貝島本社宅

織田辰藏(四三) 府下瀧野川町中里

中田富男(四三) 滿洲鞍山上臺町五

井上昇(四四) 大連市佐渡町一九ノ

岩崎泰治(四四) 兵庫縣武庫郡大社村森具

高崎太平(四四) 橫濱市西戶部町池坂九二二(郵船橫濱支店詰)

安田清雄(四四) 小石川區水道町四

森大三郎(四四) 大阪市北區會根崎

末森智良(四五) 府下瀧野川町中里

瀧田宗三郎(二) 府下西大久保二三

小松榮(二) 神奈川縣鎌倉町大町塔ノ辻二五〇ノ二

田代亮(三) 秋田縣南秋田郡金足村

黒川日本石油株式會社黒川礦業所

立木重吉(三) 京都市東山知恩院山内良正院

財間堯雄(三) 神戸市明石町三二共

南守一(三) 牛込區天神町八八

高村光次(四) 牛込區矢來町三中ノ

山下三右衛門(四) 和歌山縣西牟婁郡日置

松田次作(五) 府下落合村下落合八

小田勝次(六) 鳥取市本町四ノ二七

小林英三(六) 神戸市西須磨上マセ

○河原方(近江丸事務長)

眞野正夫(7) 日本橋區本町三井物產會社穀肥部

有川勇輔(7) 尼ヶ崎市竹屋新田宮ノ内一一一

白瀬庄三郎(7) 牛込區鶴卷町一六六平山方

岩田松藏(8) 府下東大久保四四三新倉義雄(8) 府下高田町一四四三

吉川信行(8) 府下戸塚町諏訪二三

栗木鏡(8) 名古屋市東區水筒先町二ノ四

平塚幸三(8) 麴町區永樂町二ノ二高田商會

守岡四郎(8) 上海平涼路二〇〇號

公大紗廠 秋本久雄(8) 丸ノ内日本郵船會社

主計課 櫻内政義(8) 神戸市日本郵船會社支店內

岡田巖(9) 門司市門司鐵道局電氣課

渡邊泰俊(9) 牛込區鶴卷町四一小栗方

高橋泰男(9) 牛込區矢來町一字佐美方

對馬謙三(9) 青島觀海路

上野壽(9) 岡山縣後月郡高屋町

柳田嘉一郎(9) 本郷區駒込林町一一〇

藤森温(9) 牛込區原町一ノ七五

小粥由太郎(9) 三重縣名町船馬二

八 越山五郎(9) 大阪府東成郡小路村

大瀬四六三東小路

坂本勝(9) 府下千駄ヶ谷町穩田一四三

櫻井賴一(9) 福岡縣糟屋郡席内村

古賀常盤商會橫 虎丘覺之助(10) 京都府深草町直遠

橋南一ノ五〇三小寺方

德光算正(10) 京城櫻井町一ノ一九

仁城方 田端一良(10) 三重縣度會郡小俣村

二五五〇 中村年之助(10) 大連市近江町滿鐵

社宅A區十五ノ一〇 倍井經次(10) 丸ノ内帝國ホテル

(芝區佐久間町二ノ二高橋方) 古川幸一郎(10) 麻布區龍土町二八

武田方 木村松男(10) 靜岡縣小山町川前通

リ(名簿に松勇とあるは松男の誤に付訂正す)

理 工 辻井眞(3) 小石川區大塚坂下町一〇〇

本間駒吉(4) 福島縣郡山町郡山電氣會社

千木隆一(4) 廣島市新川場町一四五ノ九

小鹽健吉(5) 大阪市南區天王寺勝

山通二ノ五八八二 井田信太郎(6) 神奈川縣厚木町富

士水電變電所社宅

黒田傳三郎(6) 芝區芝公園八號地

四番當照院境内 伊藤唯次(8) 滋賀縣栗太郡草津町

鐵道官舎第六號 黒住恒太(8) 大連滿鐵本社線路課

電氣係 原仙太郎(9) 大阪府外玉出町一

一〇〇ノ六 星見操(9) 茨城縣多賀郡松原町高

荻松原炭坑礦業所 片木榮之助(9) 神戸市熊内橋通五

ノ一〇 會根田二郎(9) 橫濱市青木町幸ヶ

谷三三九 藤田文藏(9) 本所區外手町一五太

田方 坂省三(9) 神奈川縣茅ヶ崎町小學

校橫 奥村幸一(10) 大阪府池田町滿壽美

住宅地天神通 高 師 小松鏡吉(三八) 八王子市府立第二

商業學校 川崎源吾(四〇) 熊本縣立御船中學

校 近藤正(四一) 熊本縣立天草中學

校 記錄萬作(四一) 京都市下京區西ノ

京御輿岡町二五ノ二 岡野健(四二) 長野縣上高井中學校

高梨滿林(四二) 大連市彌生町市立

高等女學校 小松稻雄(四二) 和歌山市芝ノ丁八

上木即審(4) 府下杉並村高圓寺六

五九 若生大四郎(7) 大阪市西區西島町

北港住宅一二一ノ一 小山正和(8) 本郷區駒込動坂町三

二六 高木稻水(8) 米澤市屋代町官舎

大菅文治(10) 新潟縣立新發田中學

校 加藤庄之助(10) 山口縣立柳井中學

校 武笠敏(10) 廣島縣立福山中學校

櫛田大吉(10) 滋賀縣水口町永原町

鈴木方 芦澤正(10) 山梨縣立第二高等女學

校 上田宗雄(四四) 廣島市大手町七ノ

八九ノ七 杉木時三郎(四五) 函館市汐見町二

三官舎 川又誠之進(3) 長野市横澤町七〇

三 埴野一郎(11) 府下上戸塚宮田三九

三 鷗納孝一(12) 府下荏原郡六郷村高

畑六三五 庄司直義(12) 牛込區矢來町三中ノ

丸二二號

大正十一年度得業生消息

專 政 伊藤一太郎 三重縣三重郡四郷村

室山 春元重彦 大阪府東區十二軒町二

六 春元石鹼製造所内 西場喜一郎 群馬縣山田郡廣澤村

林世熙 朝鮮忠清道燕岐郡南面燕

岐里 掛川決 埼玉縣大里郡太田村水井

太田 吉川裕 愛知銀行へ入る(名古屋

市東區大澤町五丁目木ノ瀬方)

田村義一郎 岡山縣川上郡吹屋町

野口義明 郡新聞へ入る(府下下

戸塚五五一) 小林喜代太 秋田縣大館町北秋木

材株式會社營業部へ入る(同縣扇田

町二三四) 黃朝琴 台南州鹽水街

近藤勝彦 福岡市大濱町二ノ六九

坂卷義幸 專賣局事業部技術課

坂本亮太 研究科へ入學(府下戸

塚町上戸塚三三三) 櫻羽喬止 大隈炭礦會社計課へ入る

(福岡縣遠賀郡底井野村) 守屋剛明 橫濱市根岸柏葉アパー

トメントハウス内 森澤正藏 長野縣諏訪郡岡谷全組

令工場内 菅野菊三郎 麴町區内山下町一ノ

一大日本國際聯盟協會「國際智識」編輯部 杉山逢吉 靜岡市本通七ノ六六山

口方 大 政

伊藤貞一 横濱市北方町六三五

長谷川喜太郎 府下品川町南品川

獵師町九五

蓬萊匡國 朝鮮江原道蔚珍

土居隆四郎 府下高田町雜司ヶ谷

龜原四二

太田至孝 秋田縣角館町下新町二

音羽啓眞 大藏省理財局へ入る(牛

込區) 稻田町六四(黒山方)

津島庄次 山梨縣東八代郡相興村

上天作七九九

神谷正雄 横濱市日本郵船會社筑

後丸

向若太郎 鐵道省大臣官房文書課

在勤(牛込區市ヶ谷加賀町二ノ五大

化會内)

鶴沼一郎 秋田市大町三丁目秋田

銀行へ入る

松村茂 中央火災傷害保險會社大

阪支店在勤(奈良縣北葛城郡松塚村)

福川亮 兵庫縣揖保郡龍野町

小林武城 千葉縣市川町間々船河

原九一五

木村米太郎 大阪市東區上本町八

丁目新六番地

島崎善吾 大阪市北濱藤本ビル

ロ一カ一銀行へ入る(大阪府池田町

中町二九三一)

東舜英 萬朝報政治部に入る(牛

込區市ヶ谷柳町二四伊藤方)

森秀夫 神奈川縣都筑郡田奈村長

津田

呂磐石 台灣台中縣豐原郡三角子

一九六

西田峯一 門司市清住町西田幸太

郎方

富田彌平 芝區新櫻田町憲政會本

部

高澤豐平 府下高田町雜司ヶ谷六

〇四勝森方

祖父江豐作 愛知縣一宮市琴平町

八木均 堺市九間町東一丁六

藤森篤 東洋拓殖會社京城支店

(京城府通義洞東拓社南十一號)

鄭在根 朝鮮平壤鏡齋里一六二

木崎芳一 安出銀行へ入る

森岡三八 辯護士開業(小石川區

林町九二)

伊藤惟夫 芝區神谷町一三

太田金次郎 獨逸留學中

吉田篤雄 愛媛縣宇摩郡川之江町

村田忠美 大阪府泉南郡八木村箕

路

大文

村橋智 宇都宮市蓬萊町一六二〇

三河屋内

松坂秀一 愛知縣豐橋中學校内

鈴木拾五郎 宇都宮市瑞田町三六

三石川方

萩原大東 府下巢鴨町一一一山

本方

尾關榮一郎 松竹キネマ會社へ入

尾關榮一郎

尾關榮一郎

及川甲三 府下西巢鴨堀ノ内二九

老沼重三郎 丸ノ内ビルデング内

菊屋商店勤務

大谷茂樹 濱田歩兵第二十一聯隊

第七中隊

和久本忠 福井市老松中町四

香川政一 北海道勇松郡苦小牧町

永松滿 上海北四川路安鎮坊第十

號城戸尙夫方

植木貞雄 府下西大久保七一

八神善一 愛知縣海部郡大治村砂

子

八鐵善太郎 府下野方村上沼袋二

〇五八

松橋貞一 札幌市北一條東七

松井益男 大阪歩兵第八聯隊第六

中隊志願兵班内

松岡博 室蘭市濱町四五

松島彌三郎 三重縣久居町歩兵第

五十一聯隊第三中隊一年志願兵

小林翔郎 京橋區南佐柄木町二ガ

一ロツクパッキング商會(府下巢鴨町

一七〇五鈴木方)

寺澤榮一 實業之日本記者となる

(府下落合村上落合四四四)

足立良一 神奈川縣油賀町谷戸九

二田島方

青山宣治 富山縣中新川郡北加積

村宮窪二〇六

佐藤健二 三井礦山會社東京本店

(府下戸塚源兵衛一九八田所方)

木村信次 埼玉縣北埼玉郡羽生町

北埼玉實業學校

廣井義雄 府下平塚村小山一三〇

平出固 府下大森町東山谷二八二

六伊藤方

大商

岩田高一郎 名古屋市中區老松町

八ノ一二塚本方

羽尾晴裕 ヘルシヤ貿易商會へ入

る(府下杉並村高圓寺九八五)

原政彦 名古屋市中區榮町十一屋

吳服店へ入る(同市同區鍋屋町二ノ

一〇七金森喜七方)

林麟四 東京電氣局へ入る(麴町

區飯田町六ノ一三、三町方)

西田庄之助 兵庫縣武庫郡香櫛園

森具五四六

豐田慎二 大阪市北區中ノ島六ノ

八瓦斯管賣株式會社

地村繁一 早稻田鶴卷町二三五小

島源次郎方

小山田精 藤田銀行大阪本店へ入

る(兵庫縣武庫郡住吉村雨ノ神西松

方)

大津博 名古屋市中區米屋町大津

商店

大島渡 大阪市西區阿波堀通四丁

目國廣商店

岡 仙臺市國分町一六八日本

火災保險株式會社仙臺支店勤務とな

る

渡邊信敏 福岡縣遠賀郡香月村大

辻炭礦事務所

(府下南品川三ツ木館ヶ崎七八小

松方)

梶原義博 下谷區谷中坂町三一東

館

金子有 神戸市兵庫下澤通七ノ七

〇

龜岡長四郎 大阪市東區南久寶寺

町二丁目三十四銀行支店勤務(同市

南區順慶町通四ノ一九ノ一)

横内清一 三菱銀行小樽支店勤務

(小樽市色内町八ノ三)

吉橋丈太郎 名古屋新聞政治部記

者となる(名古屋市中區田代町丸山

九三)

吉利英雄 大阪市西區靱南通日蘭

貿易會社支店へ入る(同市北區上福

島北一ノ一六〇)

田中忠良 東京電氣會社へ入る

(府下戸塚町源兵衛一四三川崎方)

高島小三郎 牛込區南榎町四七片

村秀夫方

瀧鼻嘉衛 芝區白金三光町二六九

清水方

辻田貫一 三重縣桑名町太一九

名取幸八 樺太工業株式會社へ入

る

中原龜夫 福山市築切町西備線網

株式會社築切工場

中村彌三次 本大學講師となる

(府下戸塚町諏訪中通一七三藤森方)

中野晋 日本橋區帝國生命保險會

社會計課へ入る(小石川區中富坂十

中山喬樹 岡山縣邑久郡邑久村
 村上二期 名古屋市西區島田町五
 丁目三菱銀行名古屋支店
 柳澤富之助 上田市房山町
 山崎真紀 大阪府豐能郡豐中村轟
 藤本銀行不二寮内
 山下勝 府下戸塚町一三二
 安岡布喜 古河鑛業會社尾尾鑛業
 所勤務(栃木縣足尾町中方十三號役
 宅)
 安河内隆介 神奈川縣山北富士紡
 績株式會社へ入る
 松原猛夫 府下中野町宮前三四二
 南谷方
 松田潛一 佐賀縣三養基郡田代村
 松下敬 愛知縣西春日井郡西春村
 德重
 松本廉策 岡山第一合同銀行本店
 勤務(岡山市下石井三〇六)
 松本正友 府下池袋九二四田代方
 小西敏次郎 大阪府外天王寺村中
 道二一三八響屋俱樂部
 江頭謹一郎 佐賀市蓮池町古賀銀
 行動務となる(佐賀市水ヶ江町北十
 間端)
 赤坂義雄 大阪市東區備後町田村
 駒商店輸出部勤務となる(同市南區
 安堂寺町四ノ二五)
 明石禮治 秋田縣扇田町
 新井大 麴町區平河町五ノ二井上
 方
 淺井太郎 名古屋市中區岩井町一
 八松葉旅館

佐久間勝實 日本橋區小網町三ノ
 一有馬洋行東京支店內
 齋藤善治 日本晝夜銀行芝支店勤
 務(下谷區上根岸町一四)
 坂上金之助 大阪市西區京町堀上
 通五ノ一〇五(前號堀江通とあるは
 誤)
 佐々木友三 富山縣上新川郡東岩
 瀬實業補習學校
 木下龜太郎 秩父セメント會社へ
 入社(神田區猿樂町二ノ一)
 木下利弘 岡山縣吉備郡足守町
 清田英男 千葉縣千葉郡檜橋村長
 沼島田二郎方
 三宅良造 和歌山市中ノ店北町二八
 三澤子郎 滿鐵京城驛勤務(朝鮮
 京城竹添町二ノ一七四)
 水野武雄 神戸市榮町三丁目増田
 製粉所神戸出張所(大阪市東區博勢
 町一ノ六〇)
 水野史郎 岡山縣倉敷町倉敷紡績
 株式會社(同町西町川筋五二)
 水野壽雄 神戸市再度筋三二
 柴田正治 愛知縣足助町田町石橋
 北設樂銀行内
 島田清 住友銀行東京支店へ入る
 日高景三 大阪市西區北堀江裏通
 一ノ二〇
 森孝 安田銀行本店勤務(本郷
 區追分町三〇三號方)
 杉谷茂 島根縣藤川郡鷺鷥村
 鈴木孝興 大阪市北區上福島北三
 丁目一二三館

鈴木鈴男 府下中遊谷五五三
 理 工
 石原祐吉 山梨縣西八代郡下九一
 色村
 花井宗夫 京都府八幡町
 星野半平 神奈川縣川崎町淺野セ
 メント會社技術部製造課
 落合光三 吳市旭町九八
 大橋義平 靜岡市研屋町六一
 岡部憲爾 栃木縣下都賀郡野村中
 谷
 金森四郎 茨城縣土浦町東崎
 立川隆 吳市岩方通五ノ一二今田
 方
 中野清二 府下入新井町不入斗八
 九六清水方
 野田素子 宮城縣遠田郡南鄉村大
 柳
 野島喜代治 群馬縣白井町横川橋
 本屋方
 山本澄 大阪府下池田町阪神急行
 電鐵會社車輛係
 藤井誠一 樺太工業會社へ入る
 (樺太泊居バルブ工場内)
 小林力雄 府下西巢鴨宮仲二三三
 横山方
 小松原壽次 川崎造船所兵庫工場
 勤務(神戸市西須磨新田七ノ一尾藏
 方)
 秋田政治 府下下目黒八六
 佐々木武夫 廣島縣山縣郡新庄村
 新庄高等女學校内
 木村清一郎 府下中野町二九二飯

田方
 箕田一郎 三星管工場(大阪府下
 玉出町辰巳五六九)
 皆川治平 朝鮮黃海道鳳山郡文井
 而御水里鳳城炭礦會社鳳山鑛業所
 清水善雄 古河鑛業會社好間鑛業
 所勤務(日本橋區堀江町一ノ三新家
 政治方)
 毛利次 福島縣石城郡好間村古河
 好間鑛業所
 高 師
 伊野志知郎 神奈川縣鎌倉町扇ヶ
 谷今小路
 峰岸貞次 弘前市鷹匠町二八鎌田
 方
 和田吉松(三八專政) 眞太郎と改
 名(大阪市南區天王寺北山町五四正
 三ノ一)
 瀧田辰吉(七專政) 佐久間と改姓
 (德島市浦町本富田九二九)
 比良正吉(七專政) 正弘と改名(小
 石川區林町二二)
 中野榮次郎(八電) 今共と改姓(香
 川縣高松市四番丁)
 松岡悟三(10專政) 陸三と改名
 水谷長左衛門(10專法) 憲章と改
 名(府下下戸塚二四〇吉澤内)
 高橋房治(11大商) 山村と改姓(東
 京電氣會社へ入る)
 小池幸作(11探治) 中島と改姓(貝

改姓名

島鑛業會社へ入る 福岡縣鞍手郡室田
 村桐野炭礦第二坑勤務)
 鈴木木作(12國漢) 岩堀と改姓(山
 形商業學校教諭山形市香澄町小錦三
 四)
 明治二十六年邦語政治科得業
 大正十二年六月五日逝去
 大正三十四年邦語政治科得業
 大正十二年五月廿三日逝去
 伊藤元治郎氏
 明治四十四年大學部商科得業
 大正十二年五月廿一日逝去
 清家 昇氏
 明治四十五年大學部英文科得業
 大正十二年五月二十七日逝去
 矢野 精一氏
 大正二年專門部政治經濟科得業
 大正十二年六月九日逝去
 中田 泰氏
 大正三年高等師範部數学科得業
 大正十二年五月三日逝去
 竹本 清周氏
 大正五年大學部商科得業
 大正十二年六月二日逝去
 菊 義男氏
 大正七年高等師範部英語科得業
 大正十二年五月七日逝去
 我謝 盛翰氏
 大正九年大學部商科得業
 大正十二年五月二十六日逝去
 室伏 德則氏
 大正十年大學部商科得業
 大正十二年六月五日逝去
 水野慶次郎氏
 大正十一年度商學部得業
 大正十二年五月卅一日逝去
 井浦 操氏
 右諸氏の訃報に接し哀悼の情に堪
 えず此に謹みて弔意を表す
 大正十二年七月十日
 早稻田大學校友會

學會々々合

アダム・スミス誕生

貳百年祭

經濟學會に於ては、六月二日午後一時より講堂に於て、アダム・スミス誕生二百年祭を催し、田中會長はじめ、鹽澤博士、安部、阿部、出井の各教授講師等の記念講演あり、猶ほ、記念品を陳列して、觀覽に供したり。

東洋文化の研究會

數千年の歴史を有する東洋の文化は、幾多の深遠なる思想乃至深く味ふべき事實を抱擁するに拘はらず、其の攻究方法宜しきを得ざる等のため、未だ其眞價の世に知られざるもの尠なからざるを以て、これが研究を深くし、新たな組織の下にこれを解剖し且つ綜合して、東洋の學藝の獨立を圖らんとする希望は、最近識者の間に芽させる熱烈なる要求である。我が學園内に於ても、先年來密かにこの種の切望を懐ける一部の教授及び研究科在學者等は、東洋文化の純然たるアカデミックな研究をなす目的を以て、相寄つて其の研究を報告し、若くは討究を爲し、更に歐米の思想乃至歴史との比較研究を試むることとし、客年より毎月一回宛其の會合を催して、其の攻究を進め居れるが、最近の研究内容左の如し

『孔子の根本思想に就いて』

牧野謙治教授概説

『書經に現はれたる政治思想』

研究報告者 内 田 繁 隆

講評及び指導 松平康國教授

同 高橋清吾教授

『論語を中心とする孔子の政治思想』

研究報告者 内 田 繁 隆

講評及び指導 松平康國教授

同 高橋清吾教授

『田能村竹田と石川丈山の思想傾向に就いて』

山口剛講師

右の研究會に参加せる人々左の如くであるが、大學院及び研究科の在學者は固より校友諸氏にして右研究報告若くは聽講希望の向は恩賜館政治經濟學部研究室高橋教授迄申出でられたし。(同會幹事報)

松平教授 牧野教授 高橋教授

西 義 顯 本庄主一 岡田信高

横井謙一 高橋義郎 内田繁隆

野崎辰己 秋山 寛 天川信雄

關川茂治

早大新聞學會主催の大演奏會

早稲田大學新聞學會主催東京朝日新聞社後援のもとに故大隈侯記念事業後援大演奏會は六月九日午後七時から神田一つ橋共立女子職業學校講堂に催された、しきりなしに降る雨

中にも會場につめかけること男女數百名先づ新聞學會副會長五來教授の開會の辭に大喝采を迎へ、『死を悼む歌』マンドリン合奏の後、赤きガウンの輝き』の管絃樂は故侯を偲ばせ合唱番の後、フリュート絃樂器四部合奏は場内咳だに聞へず緊張して居た會集は終るやわれるばかりの拍手喝采で二度び舞臺に現はれ返禮をなして奥へ姿を消しても拍手の音はしばらく場内に満ちた。かくして新聞學會幹事川俣國利氏の閉會の辭を述べ『都の西北』を會集一同と合唱して盛況を極めた。散會したのは同九時二十分であつた。尙新聞學會より多少記念事業部へ寄附される見込であらう。

早稲田大學佛教青年會

同高等學院

我が學園の創立者小野梓先生を始祖とした佛教々友會も、一盛一衰はあつたにしろ、三十有五の歲月を闊して佛教青年會と名を改め、高等學院にも佛教青年會を起して協力することとなつた。爾來一ケ年は著實に會合の數を重ね、同志の糾合結束にとめて居たが、今學年度に入つては多數面目な會員を得て、堅實な歩調にも活氣の溢れる様になつた。されば去る五月二十六日(土)午後二時から新に開放された大隈會館で、新入會員歓迎の意を含めて、諸先輩と俱に集つて或は感話に、或は會に對する抱負等互に胸襟を開いて懇談

學生及運動記事

高等學院體育會大會

六月十日 第二回體育大會を第一高等學院校庭に開催す。當日は照らず降らすの運動日和に加ふるに極東大會の刺戟によつて益々緊張と熱とを加へたる若人の意氣昂く、一般民衆士女の參觀者陸續として集り来る。午前八時合圖の花火早稲田の森に響き渡つて競技は開始されたり。各競技毎に選手連の活躍目覺ましく續々優秀なる記録を出す。日頃の鍛錬と男性美の高潮とを現はす勇壯なる競技の間には二人三脚、パン食競走等滿場の賑を解かしむるあり。競技は進み來つて午後三時半商科の應援隊を先にして場内に入り来る、何れも選手に熱烈なる聲援を與へて之を戰場に送り、此に當日競技の焦點たる分科リレーレースは開かれたり。各科選手の技倆伯仲して絶好のレースをなし殊に政治科と商科とは抜きつ抜かれつして遂に月桂冠は政治科選手の頭上に落ち凱歌赤色應援團に擧る。時

四百米突競走獎勵杯其 他賞杯の寄贈

早稲田大學競走部の近年に於ける異常なる好成绩に徴し、競走部部員及選手たりし校友並びに一般校友有志は糾合して、各種競技中聊か他種競技に劣るやの感ある四百米突競走に對し、毎年度該競走に最も優秀なる成績を擧げたる部員又は選手の姓名を彫刻し、獎勵に資せんが爲、純銀製大獎勵杯を寄贈する事とし、昨年十一月二十五日山本競走部長列席の上寄贈を了したるが、更に今回極東競走大會に於て新記録を作成したる左記二名に對して純銀製記録賞杯を六月十日授與したり。尙向後の新記録作製者に對しても同様賞杯を授與する事とし、競走部員の發奮並に競技の正常にして健全なる發達を期する旨校友有志相集り申合をなせり

(以上、堀江宏報)

五千米突競走新記録作成者 繩田尙門

三千米突競走新記録作成者 行田重治
追て右奨勵杯寄贈に賛成したる者の姓名左の如し。

- 山本 忠興 井上 松雄 金成 良雄
- 松宮 三郎 吉田 愛七 大久保謙治
- 多賀 叔男 金木 九萬 柳川眞澄吉
- 加藤 秀三 山崎 實 鈴木 謙
- 宇田川政吉 丸尾 松彦 岡 克巳
- 鈴木得之助 二宮 和定 大木 眞一
- 森田 延作 松岡 正一 八住 俊一
- 橋本 義明 巽 榮吉 松谷 彌一
- 角田 文雄 矢島 敏雄 小林 信行
- 上松健一郎 堀江 宏

早大横濱會事業報告

横濱在住の 本大學學生に依つて、組織され、三宅聲氏を會長とせる本會は、さきの學報(三二三號)に、報じたる如く、會員相互の親睦を圖り、且つ横濱市の、文化の向上に資せんとする主意に依つて生れたものであるが、創設以來三年間の努力奮闘の賜物として、益々、基礎は強固になり、文字通りに數に於ても二〇〇と云ふ舊に倍せる會員の親睦は、日々に厚く、外、横濱市民の多大の信用を博しつ、あることは本大學を背景とする諸賢の、共に喜んで戴きたい次第である。

本會は去る六月三日、大學音樂部員を聘し、横濱開港記念會館に於て、大音樂會を開催し、故大隈侯記念事業寄附の一助をしたのであるが、二千數百の來聽者に依つて、満堂爲に

溢る、の盛大を極め、二〇〇圓を寄贈し得たことは、會員一同校恩の聊かを、報じたるを喜んでゐるが、是の機に際し過去三年間の本會の事業を、かいつまみ報告致したいと思ふ。這般、十年度に於て、十一月に同じく記念會館に於て、音樂部員に依る華々しき演奏會を催し、來會者一同に十分なる満足を得たのを始めとして、十一年度一月十八日に、本會主催のもとに、鹽澤、内ヶ崎、五來の教授諸氏を聘し、嚴肅なる故侯追悼講演會を開催した。是、地方に於ける故侯追悼會の嚆矢であつた。五月には、第一回故侯記念事業のため、野球部の來濱を乞ひ、當時横濱市の覇者ジャイアント、チームとの野球戦は、本春、體育奨勵活動寫眞を公開したること、其に、市民に運動精神を

促進させるに大なる効果を齎した。本會は野球大會當日の純益五百圓を本大學に寄贈し得たことは、光輝ある本大學に負ふ所多きは勿論、一つに野球部々員諸君に深く其の勞を感謝する次第である。

尙本會は例會として、毎春秋二回に大會を催してゐる。本會に多大の後援を賜はる鹽澤教授も御來會下されたこともある。「自分は種々な會に關係してゐるが、横濱會程、システマチックに發展と効果を收めてゐる會は當市には未だない」とは常々會長の語られる所である。

此の如くして、成すべき多くの事を計畫してゐる本會は同好同郷諸君の御援助を乞ふ。

雑 錄

同好會の楽しい集り

いさ、かのこだはりもない、自由で温か、而もあつさりとい行くのが特長のわが同好會は、その第五回例會を、柴又の川甚で催しました。

五月廿六日、手廻しのよい梅雨とは思はれる程、ふりにふつた雨も晴れて、四時頃からもうぼつ／＼同好の君子來會、小利根の堤は櫻の青葉の若葉、微風に流れる白帆を點綴した

おもしろさ。

やがて柴又名産の「草だんご」が出る。それを圍んで談話が起る。古桶さんが玉石混淆のシヤレを連發するそこへ宮井さんのシラツなのが合の手に入る。しゃべるにも聞くにもウツかりは御法度である。松平さん牧野さんを中心に大隈侯の逸話が盛んに出て偉人をしのぶ。こゝらもこの會のい、とこだらう。

そろ／＼お腹の蟲が酒を呼ぶ五時

半頃、ずらりとお膳が出る。お通しは青々と新らしいソラ豆、アラヒ、鯉コク、おにがら、茶わん、赤貝と鮑のお酢、それにうな蒲。たんまりお酒を仰つて會費わづかに四圓五十錢。幹事さんお骨折も想像される。

おくれ走せに鹽澤さんも見え、いよく／＼話に花が咲く。おもては次第にたそがれて、行々子の聲がおさまり、蛙の合唱が盛んになる。縦談横議に時を移し、かくて八時過ぎに散じた。

次回は何處になるやら、一晚宿りの珍計畫もあるらしい、楽しみに待ちませう。諸兄の御出席のいよく／＼多からむことを祈る。

出席者及次回の幹事を次に。

出席者(次第不同)

- | | |
|--------|--------|
| 松平 康國 | 高杉 瀧藏 |
| 牧野 謙次郎 | 熊本 謙二郎 |
| 永井 一考 | 難波 理二郎 |
| 勝俣 餘吉郎 | 前橋 孝義 |
| 古桶 顯理 | 鹽澤 昌貞 |
| 宮井 安吉 | 増田 綱 |
| 岸本 能武太 | 原 嶋 茂 |
| 高橋 清吾 | 矢口 達 |
| 渡 俊治 | |
| 次回幹事 | 難波 理二郎 |
| 熊本 謙二郎 | 松 永 村 |
| 増田 綱 | 鹽澤 昌貞 |

渡る。會するもの全校を擧ぐる百四十名の職員未明に東京を發し強羅温泉にと向ふ。小田原より登山電車に乗じて湯本に至る。これより隧道や溪谷を過ぎ鐵路一時間半にして強羅の會場へ着す。會場は箱根土地會社の厚意に依る一別荘なる洋館建、着すれば初夏の薄汗を温泉に洗ふ。高田總長田中理事親しく臨席せられ、先づ總長より挨拶あり、總長明治初年に初めて箱根八里を越えられし當時追憶に興味ある御話を交へ、今日迄の職務の勞を謝し尙將來の協力一致の要を説かる。これに對して難波新幹事より謝辭を述べ、一同畫餐を俱にし、各々遊覽の途に登る。三々五々打ち集ひ或は大湧谷を越えて湖を横切り苦蒸す舊道を辿り湯本に出づるあり、或は木質底倉を経て山道を湯本に下るあり、思ひ思ひの行程に依りて箱根全山を逍遙し、天然の壯美に酔ひ十分に一ヶ年間の勞を慰やしたり。

大正十二年七月三日印刷納本
大正十二年七月十日發行
東京市牛込區矢來町三番地 行
編輯兼發行人 難波理一郎
東京市牛込區櫻町七番地
印刷者 渡邊八太郎
東京市牛込區榎町七番地
印刷所 日清印刷株式會社
府下豐多摩郡戸塚町字下戸塚六
百四十七番地
早稲田大學
發行所早稲田大學校友會

記念事業部記事

更に校友諸君に懇ふ

故總長大隈侯爵記念事業は昨春發表以來、校友諸君を始め、滿天下篤志諸賢の深厚なる同情と白熱的援助とにより、既に、寄附申込額百七十五萬圓に上り、當局者一同感激に禁へざる所なり、然るに尙ほ豫定の二百萬圓に達せざること遠く、殊に今秋よりは愈記念大講堂の建設に着手する計畫なれば、未申込の校友諸君子は此際至急御申込あらんことを切に希ふ。

大正十二年七月

早稻田大學

總長 高田 早苗

募集規定(略)

一、寄附金の拂込は一時にても、年賦(三ヶ年以内)にてもよろし
 一、集金法は銀行振込、振替貯金、集金郵便又はその他の方法にても御指定に依る
 (本大學振替貯金口座東京一七九五〇番)

故總長大隈侯爵記念事業

資金申込芳名

第拾四回(自大正十二年五月廿一日至六月廿一日)

各府縣累計

東京府	一、〇六七、四九二、〇五〇
大阪府	七三、一九五、〇五〇
兵庫縣	五三、二九二、三〇〇
愛知縣	三四、七六二、九五〇
神奈川縣	三二、四四〇、〇〇〇
京都府	二七、九四六、三七〇
福岡縣	二五、八六四、三〇〇
佐賀縣	二二、四〇四、七〇〇
岡山縣	一九、九九一、〇〇〇
三重縣	一八、七八六、四三〇
富山縣	一八、六七四、八〇〇
新潟縣	一七、九八二、〇二〇
栃木縣	一六、六一六、八〇〇
長野縣	一六、三一八、二二〇
滿洲	一五、九一四、〇五〇
鳥取縣	一五、一四一、〇〇〇
長崎縣	一四、七四八、四〇〇
千葉縣	一三、八九三、二一〇
和歌山縣	一三、五一七、三五〇
北海道	一三、三八八、三六〇
大分縣	一二、八八八、〇一〇
山形縣	一一、七二〇、〇〇〇
静岡縣	一一、五七〇、四一〇
香川縣	一一、五〇八、〇〇〇
埼玉縣	一〇、九三二、〇〇〇

山梨縣	一〇、九二五、六〇〇
宮崎縣	一〇、七五九、四〇〇
福島縣	一〇、五五七、八九〇
廣島縣	九、八九九、五〇〇
宮城縣	九、七九四、五〇〇
愛媛縣	九、六〇九、三五〇
茨城縣	九、〇七三、〇〇〇
群馬縣	八、一二八、八〇〇
島根縣	七、七三七、〇〇〇
福井縣	七、七三七、〇〇〇
岐阜縣	七、六〇七、〇〇〇
鹿兒島縣	七、三八六、五〇〇
朝鮮	七、二八三、四〇〇
校外生	六、七一五、一七〇
滋賀縣	六、二三四、二〇〇
石川縣	六、〇五二、六三〇
秋田縣	四、九二二、二〇〇
工手學校卒業生	四、九一二、〇〇〇
奈良縣	四、二八一、五〇〇
青森縣	四、二七一、六〇〇
支那	四、一〇二、〇〇〇
山口縣	三、四四三、六〇〇
熊本縣	三、二八七、〇〇〇
德島縣	二、二九五、〇〇〇
海島外	二、〇六九、六七〇
高知縣	一、八三四、三八〇
臺灣	一、三五九、〇〇〇
沖繩縣	一、三四九、〇〇〇
岩手縣	一、〇一三、〇〇〇
樺太	二〇五、〇〇〇
總累計	一、七六五、八三三、七五五

東京府

金參萬參百拾四圓四拾貳錢也
故總長大隈侯爵記念美術展覽會收益

一〇、〇〇〇	原田積善會殿
六、三六〇、三二	早稻田大學殿
五、〇〇〇、〇〇	野田總一郎殿
二、〇〇〇、〇〇	酒井 忠克殿
五〇〇、〇〇	原 安三郎殿
三〇〇、〇〇	堀内 計策殿
三〇〇、〇〇	横田 秀雄殿
三〇〇、〇〇	牧野菊之助殿
三〇〇、〇〇	麻田駒之助殿
二五〇、〇〇	大山 郁夫殿
二五〇、〇〇	日高 只一殿
二〇〇、〇〇	出井 盛之殿
二〇〇、〇〇	新里藤一郎殿
二〇〇、〇〇	柳川 勝二殿
二〇〇、〇〇	齋藤 惠雄殿
二〇〇、〇〇	志賀 重昂殿
二〇〇、〇〇	遠藤 隆吉殿
一五〇、〇〇	原 隨園殿
一五〇、〇〇	吉田與一郎殿
一五〇、〇〇	杉山 令吉殿
一〇〇、〇〇	飯田彌五郎殿
一〇〇、〇〇	猪俣津南雄殿
一〇〇、〇〇	西澤金次郎殿
一〇〇、〇〇	西沼 某殿
一〇〇、〇〇	田崎 長國殿
一〇〇、〇〇	村井銀行殿
一〇〇、〇〇	江戸川支店殿
一〇〇、〇〇	内木錦次郎殿
一〇〇、〇〇	山崎定太郎殿
一〇〇、〇〇	松本健之助殿

一〇〇、〇〇	後藤 曠二殿
一〇〇、〇〇	弓場 重泰殿
六〇、〇〇	浮田 秀樹殿
六〇、〇〇	喜多 三郎殿
五〇、〇〇	小田内通敏殿
五〇、〇〇	貝原 宇平殿
五〇、〇〇	熊本謙二郎殿
五〇、〇〇	福田兵次郎殿
五〇、〇〇	齊藤 舜榜殿
五〇、〇〇	水口源太郎殿
五〇、〇〇	宮重 崎藏殿
三二、七九	早大新聞學會殿
三〇、〇〇	主室音樂會殿
三〇、〇〇	戸田 如水殿
三〇、〇〇	山下 貞武殿
三〇、〇〇	森麗 山殿
一八、〇〇	久住 進殿
一〇、〇〇	新沼 貫一郎殿
一〇、〇〇	吉村 弘殿
一〇、〇〇	竹中 鐵哉殿
一〇、〇〇	高折 啓治殿
一〇、〇〇	八杉 貞利殿
一〇、〇〇	朝倉 豐吉殿
一〇、〇〇	平野 高殿
一〇、〇〇	尾本文治郎殿
五、〇〇	金子 千代殿
五、〇〇	上代 たの殿
東京洗濯業組合牛込支部	
一八、五〇	田村 丑松殿
一五、〇〇	野村 得一殿
一五、〇〇	菅谷久七郎殿
一〇、〇〇	加瀬 英三殿

一〇、〇〇	古明地義次殿
一〇、〇〇	菅谷 久六殿
五、〇〇	池崎庄太郎殿
五、〇〇	大塚徳次郎殿
五、〇〇	田矢 榮造殿
五、〇〇	上原 多藏殿
五、〇〇	丸山馬太郎殿
五、〇〇	米持 磯治殿
五、〇〇	城代 仁作殿
五、〇〇	鈴木 才政殿
金參圓宛	石田得太郎殿○吉田林造殿○吉田傳吉殿○藤田光三殿●金貳圓宛若林倉藏殿○川西彌三郎殿○吉田市太郎殿○高木脩二殿○高島治郎殿○藤倉茂造殿○小原儀助殿○淺井宇三郎殿○淺田幸三郎殿○佐々木芳太郎殿○佐々木藤吉殿○佐々木眞吉殿○木俣泰一郎殿○峰村又四郎殿○關嘉一殿○菅沼次郎殿●金壹圓宛伊藤新三郎殿○萩原亨基殿○輪千重雄殿○川口清藏殿○風見惣四郎殿○吉田はな殿○高橋武三殿○高田一彌殿○高橋悅司殿○上原健三殿○黒田榮五郎殿○升田三郎殿○手塚平三郎殿○甘利彦六殿○佐野吉右工門殿○坂井清助殿○菅原金四郎殿●金五十錢也 田中三次郎殿
二區二部下宿業組合	
一〇、〇〇	華陽 館殿
一〇、〇〇	八島 館殿
一〇、〇〇	紅葉 館殿
一〇、〇〇	秀玉 館殿
七二、〇〇	池田 館殿

一〇、〇〇	久野 金市殿
五〇、〇〇	竹原 館殿
五〇、〇〇	金田 館殿
五〇、〇〇	滿天 寮殿
五〇、〇〇	有隣 館殿
四〇、〇〇	北田 竹雄殿
三六、〇〇	中根 館殿
三〇、〇〇	加州 館殿
三〇、〇〇	鎌倉 館殿
三〇、〇〇	大成 館殿
三〇、〇〇	松葉 館殿
三〇、〇〇	芙蓉 館殿
三〇、〇〇	光玉 館殿
三〇、〇〇	麻見 館殿
三〇、〇〇	金峰 館殿
三〇、〇〇	諏訪 館殿
二〇、〇〇	福王 館殿
二〇、〇〇	天心 館殿
二〇、〇〇	相田 辰殿
二〇、〇〇	錦生 館殿
二〇、〇〇	水明 館殿
一〇、〇〇	中塚 たけ殿
一〇、〇〇	齋藤 ヨシ殿
一〇、〇〇	清風 館殿
早大横濱會殿	
三〇、〇〇	酒井 英一殿
二五、〇〇	渡邊眞之丞殿
二〇、〇〇	初谷 定吉殿
一五、〇〇	石川 柳市殿
一五、〇〇	小暮林太郎殿
五、〇〇	増澤豊次郎殿

一〇、〇〇	鈴木莊四郎殿
三〇、〇〇	須藤憲作殿
三〇、〇〇	小泉 改平殿
三〇、〇〇	阿部 米造殿
三〇、〇〇	大島理太郎殿
二〇、〇〇	阿部章一郎殿
二〇、〇〇	阿部章一郎殿
一〇、〇〇	大山岩次郎殿
一〇、〇〇	荻野萬太郎殿
一〇、〇〇	松村半兵衛殿
一〇、〇〇	阿由葉勝作殿
一〇、〇〇	木村 淺七殿
一〇、〇〇	須永 甲作殿
一〇、〇〇	馬場 丑松殿
六〇、〇〇	内山保五郎殿
六〇、〇〇	柳田 國治殿
六〇、〇〇	増澤源次殿
六〇、〇〇	今尾 彌平殿
五〇、〇〇	丸山 啓次殿
五〇、〇〇	藤沼 彌一殿
五〇、〇〇	小和田林三郎殿
三〇、〇〇	石井 多吉殿
三〇、〇〇	橋本 求馬殿
三〇、〇〇	千手 恒殿
三〇、〇〇	丸山 金助殿
三〇、〇〇	福田 健治殿
三〇、〇〇	須藤彌三郎殿
二五、〇〇	近藤 二六殿
二〇、〇〇	吉田 光隆殿
一五、〇〇	初谷 定吉殿
一五、〇〇	石川 柳市殿
一五、〇〇	小暮林太郎殿
五、〇〇	増澤豊次郎殿

川島 守一殿

群馬縣 田村 近藏殿 原 良吉殿

福島縣 諸橋 守次殿 新田目春松殿 筒井 磐雄殿 藤田 榮助殿 小南不二男殿 諸橋元三郎殿 關内 正一殿

宮城縣 秀島 省三殿

岩手縣 大釜 德治殿

秋田縣 清水 貞祥殿 佐々木 順殿

靜岡縣 金井 重殿 宇田 庭治殿

愛知縣 春日井丈右衛門殿 森本 善七殿 加藤 甫殿 近藤文治郎殿 成田謙次郎殿 辻 生一殿 牧野 劔吉殿

岐阜縣 長屋 幸造殿

長野縣 金壹團宛 岩崎條之助殿 岩崎佐助殿 星野定治殿 星野平八郎殿 星野喜四郎殿 戸塚勇殿 神津貞子殿 阿部竹次郎殿 相川市太郎殿 阿部平八郎殿 森泉宗太郎殿 關口藏治殿

新潟縣 辻 三郎殿 關根 四策殿 桑原 寬平殿

富山縣 古瀬 正勝殿 安念 精一殿 上田 良一殿

福井縣 今村 七平殿 西野 藤助殿

滋賀縣 小林 善吉殿

和歌山縣 小林 長平殿

奈良縣 大浦 治作殿

京都府 松風 憲二殿

兵庫縣 中川銑三郎殿 正田房治郎殿 荒川辰三郎殿 太田 儀一殿 足立新九郎殿 松浦 靜義殿

廣島縣 松浦 靜義殿

鳥取縣 三好榮次郎殿 小川 貞一殿 湧島利兵衛殿 松本鹿太郎殿 諸遊 康英殿 伊藤爲次郎殿 井上 蛟殿 生和 光藏殿 生田文一郎殿 中村茂一郎殿

島根縣 增野 常介殿 江角 興義殿 中西 淳亮殿 米原伊之助殿

京都府下殿 出身學生團

大阪府 藤田平太郎殿 橫山常次郎殿 大西 良三殿 早大同攻會殿 伯太支部

昌子 亮一殿 福岡 雄一殿 澄田 澤造殿 堀江 芳一殿 小川 孝祐殿 岡本 俊人殿 武田善之助殿 宮津儀三郎殿 白築 祐久殿 島田 兵藏殿 紹慶 密應殿 森山 文吉殿 大東久一郎殿 佐々木重藏殿 西村豐三郎殿 川村龜五郎殿 橫井 吉隆殿 野崎辰次郎殿 小笹 本市殿 森山 彰宗殿

高知縣 上田 紫郎殿 中川 喜義殿 鹽見 連殿 佐藤 孝殿

愛媛縣 土岐 建吉殿 秋山六右衛門殿

福岡縣 宮崎縣

植松熊太郎殿

丹澤 眞澄殿 長岡覺之助殿 長崎辰兵衛殿 阿部 興作殿 小笠原辰治殿

中島 萬歲殿 田中吉次郎殿

吉中 顯郎殿

楓櫻會上海殿 支部一同殿

中村 寬助殿 長田 雄次殿

長澤勝之丞殿

泉 靜雄殿

前號訂正欄中 谷 多辨磨殿ハ谷 多喜磨殿ニ訂正ス

早稻田學報(大正十二年七月)

The Japan Times Senior Edition

シヤパン タイムス 大タイムス

創刊七月一日號出來。一部金貳拾五錢

日刊シヤパンタイムス社直營、日本一の英語熟達大成用高級小英字新聞、現代英語全部(四五千字)征服資料満載。英字新聞雜誌講義録等の特色全部を抱擁具備せる最新式編輯。●半年乃至一年間讀めば内外の日刊英字新聞雜誌がラクに讀める●日刊の英字新聞がラクに讀めたら其人の英學力は一人前以上である

目次
●内外重要記事數十件 ●英文評讀破力養成 ●常用現代英語の單語單句と其の活用 ●英字新聞雜誌讀破基礎力養成資料 ●歐米英字新聞雜誌讀破練習資料 ●英文廣告の讀方豫習 ●行き詰った現代英語研究の新進路 ●常用單語三〇〇〇網羅一覽表 ●寫真版十數個

左記範圍の新人諸彦の購讀に適す

中學卒業以上、各高等學校、各大學生 ●陸海軍將校、各省各官公衙官吏
小中學校教師、商店會社其他各方面の実業家、其他有らゆる智識階級の
新人全部

發行所 東京市麴町區内幸町一丁目五番地
シヤパン・タイムス社

電話 銀座(三二六〇) 三二六一
振替貯金東京一七四〇二

能率増進と

アドレスペーパー (宛名紙)

裁體見本

東京市日本橋箱崎町四ノ貳
南之部
星成社 様

日報發送に、月報發送に、書信發送に、雜誌書籍發送等に、

アドレスの御使用を御勧め致します

東京日本橋區箱崎町四ノ貳

見本 送呈 星成社
アドレス 専門印刷

電話 濱町二八八七番
振替東京二〇五一三番

チューブ入 大形金四十五錢
中形金二十五錢



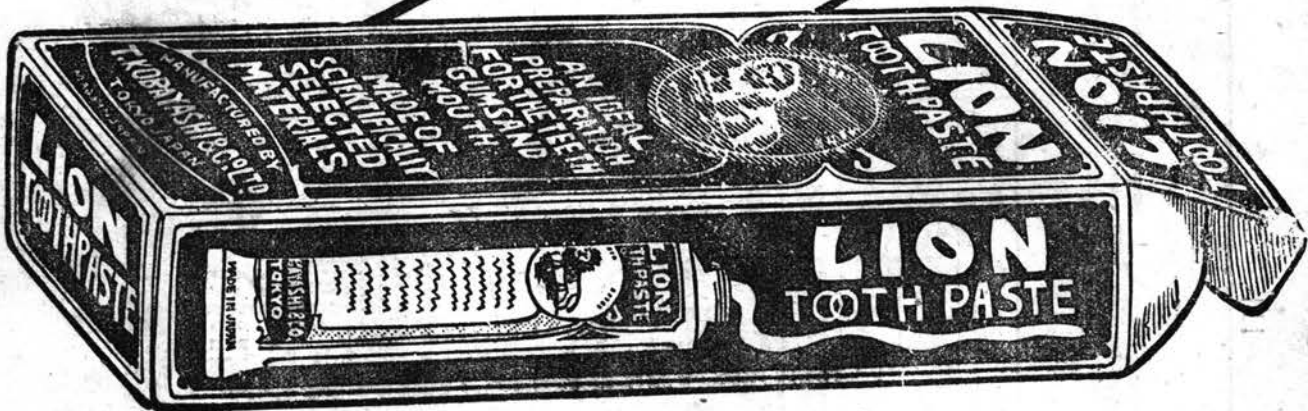
清新せいしんの香味かうみ最まつもなつかしき

ライオン煉歯磨ねりかはみがき石

歯牙しやに對する清掃せいそう的効果てきこう最まつも優秀ゆうしゆうにして、而もその香味かうみの清新せいしんなる、
新時代しんじだいの紳士淑女しんししよふの方かたの此上このうえもなき愛用品あいようひんとなつてをります。

リボン状りぼんじやうに出る美しさ、使用後しやうごの清爽せいそう感かん
容器ようきの優特ゆうとくなる、使用機帶しやうきたい共に至便しじべんなる

まことに御家庭用ごかいていようとして、御旅行用ごりょくぎやうとしても文化生活ぶんかせいふ上缺くべ
からざる逸品いつひんで御座ございます。



ライオン煉歯磨本舗
東京市本町区小森町
大塚市本町区小森町
代官店 上野区本町区小森町
小森町区小森町
小森町区小森町
小森町区小森町